

諫早市文化財調査報告書 第15集

ふう かん だけ し せき ぼ ぐん
風觀岳支石墓群
発掘調査概要報告書

2002

諫早市教育委員会

発刊にあたって

このたび、平成9年度から当教育委員会において発掘調査を実施しております、風觀岳支石墓群の調査概要報告書を発刊する運びとなりました。

この遺跡は昭和45年に発見され、西北九州に所在する支石墓群の中でも、規模や立地に特徴的な要素を持ち、本市を代表する遺跡として知られておりました。その後昭和50年に長崎県教育委員会により調査が行われ、遺跡の内容の一端が明らかとなりましたが、分布範囲や基数など未解明の部分が課題として残りました。これらの解明を主目的として調査を再開したところ、新たに12基の支石墓を確認し、下部構造に関する知見を得ることができました。

本書は、平成13年度まで5年間の調査概要を記したものですが、14年度以降も調査を継続する予定としておりますので、今後の成果につきましても期待を寄せているところであります。

本書が埋蔵文化財についての認識と理解を深め、学術研究に寄与する事ができれば、幸いと存じます。また、支石墓群の内容について多くの方々に理解され、古代を体感できる場として活用されることを願います。

最後に、調査の実施にあたり、快諾を頂いた地権者の方々、また現地での調査及び報告書作成にご協力頂きましたみなさんに感謝を申し上げ、発刊の挨拶いたします。

平成14年3月

諫早市教育委員会

教育長 前田重寛

例　　言

1. 本書は、諫早市破籠井（わりごい）町及び下大渡野（しもおおわたの）町に所在する、風観岳（ふうかんだけ）支石墓群の発掘調査概要報告書である。

2. 本書では、平成9年～13年度に及ぶ5か年の調査概要について記載している。

3. 調査期間は次のとおりである。

平成9年度 平成9年8月6日～10月8日

平成10年度 平成10年8月17日～10月29日

平成11年度 平成11年7月28日～10月15日

平成12年度 平成12年12月4日～平成13年2月27日

平成13年度 平成13年7月10日～10月11日

4. 調査は国庫補助ならびに県費補助を受け、諫早市教育委員会が実施した。

5. 調査にあたっては岡村道雄（文化庁主任文化財調査官）、櫛宜田佳男（文化庁文化財調査官）、西谷正（九州大学文学部教授）の各氏からご指導を頂いた。

6. 調査は秀島貞康・川瀬雄一・古賀力・橋本幸男・大庭孝夫（現：福岡県教育委員会）が担当した。

7. 遺物の実測は、土器、中・近世及び近代資料については橋本が担当し、石器については川瀬が担当した。

8. 本書の執筆は、土器、中・近世及び近代資料については橋本が担当し、その他については川瀬が担当した。

9. 報告書の作成にあたっては、秀島・古賀・渡邊三重子・平山裕子・富永淑子・三原寛子・降田真佐子・大島大輔の協力を得た。

10. 図版1上段の写真は、大成ジオテック（株）撮影（平成4年）の空中写真を掲載したものである。

11. 本書の編集は川瀬が行った。

12. 出土遺物及び写真・図面類は、諫早市郷土館で保管している。

本文目次

第Ⅰ章 序 説	1	
第1節 調査に至る経緯と調査組織	1	
1. 調査に至る経緯	1	
2. 調査組織	2	
第2節 遺跡の立地と環境	2	
1. 遺跡の地理的環境	2	
2. 周辺の遺跡と歴史的環境	4	
第Ⅱ章 調査の成果	5	
第1節 調査の概要	5	
1. 調査の概要	5	
2. 層 位	5	
第2節 遺 構	6	
1. 支 石 墓	6	
S A - 1 6	S A - 5 10	S A - 9 12
S A - 2 10	S A - 6 10	S B - 1 12
S A - 3 10	S A - 7 12	S B - 2 12
S A - 4 10	S A - 8 12	S B - 3 18
2. ピ ッ ト		18
3. 土 墓		18
第3節 遺 物	22	
1. 土 器	22	
①縄文時代晩期～弥生前期の土器	22	
②古墳時代の土器	28	
2. 中・近世、近代の遺物	29	
3. 石 器	29	
4. 出土傾向の概要について	35	
第Ⅲ章 ま と め	37	

挿 図 目 次

第1図 諫早市位置図	2
第2図 周辺遺跡分布図	3
第3図 調査地点位置図	7～8
第4図 土層図	9
第5図 S A - 1 支石墓実測図	11
第6図 3・5次調査地点トレーナー配置図	13
第7図 S A - 3～8 支石墓配置図	13

第8図	S A - 3 支石墓実測図	14
第9図	S A - 4 支石墓実測図	15
第10図	S A - 6 支石墓実測図	16
第11図	S A - 7 支石墓実測図	16
第12図	S A - 8 支石墓実測図	17
第13図	S A - 2 支石墓実測図	19
第14図	S B - 1 支石墓実測図	19
第15図	S B - 2 支石墓実測図	19
第16図	S B - 3 支石墓実測図	19
第17図	5 - 10 T ピット群平面図	20
第18図	5 - 5 T ピット群平面図	20
第19図	5 - 1 T ピット群平面図	21
第20図	5 - 7 T ピット平面図	21
第21図	2 - 34 T 土壙実測図	21
第22図	土器実測図①	23
第23図	土器実測図②	25
第24図	土器実測図③	27
第25図	中・近世・近代遺物実測図	29
第26図	石器実測図①	31
第27図	石器実測図②	33
第28図	石器実測図③	33
第29図	石器実測図④	34
第30図	遺物出土傾向図	36

表 目 次

第1表	周辺遺跡地名表	3
第2表	下部構造計測表	6
第3表	調査面積集計表	7 ~ 8
第4表	遺物集計表	22
第5表	石器観察表	34
第6表	石器組成表	36

図 版 目 次

図版1	調査地周辺空中写真、S A - 1 上石、S A - 1 蓋石（2層目）、S A - 1 蓋石（石棺直上）、S A - 1・2 出土地点近景	40
図版2	S A - 1 下部構造①・②、S A - 2 検出状況、S A - 3 ~ 9 出土地点近景、S A - 3 - 5 上石近景、S A - 3 蓋石（2層目）、S A - 3 蓋石（石棺直上）、S A - 3 下部構造①・②	41
図版3	S A - 4 上石・S A - 3 下部構造、S A - 4 蓋石（2層目）・S A - 3 下部構造、S A - 4 蓋石（石棺直上）、S A - 4 下部構造①・②、S A - 6 ~ 9 近景、S A - 6 蓋石（石棺直上）、S A - 6 下部構造	42
図版4	S A - 7 出土状況①・②、S A - 7 下部構造①・②・③、S A - 8 上石、S A - 8 蓋石（2層目）、S A - 8 蓋石（石棺直上）、S A - 8 下部構造①・②	43
図版5	S B - 1 上石、S B - 1 下部構造、S B - 2 上石、S B - 2 下部構造、S B - 3 上石、S B - 3 下部構造、2 - 34 T 土壙①・②	44
図版6	5 - 10 T Pit 4、Pit 8・9、Pit 12、Pit 13、5 - 5 T ピット群、5 - 1 T ピット群、5 - 1 T Pit 1、Pit 4	45
図版7	出土遺物	46

第Ⅰ章 序 説

第1節 調査に至る経緯と調査組織

1. 調査に至る経緯

昭和45年、九州横断自動車道建設に先立って長崎県教育委員会が実施した、大村湾東岸地区分布調査の際に、諫早市内において50箇所の埋蔵文化財包蔵地が確認された。風観岳支石墓群はその中の最重要遺跡とされ、12基の支石墓が存在することが確認された。昭和46年、同教育委員会が支石墓群の位置図を作成。その後、昭和49年、文化財パトロールの際に12基中6基が損壊していることが確認されたため、長崎県教育委員会・長崎県文化財専門委員・関係市の間でその保護策が検討されることとなり、その一環として、支石墓群の分布範囲および基数確認の実施が計画された。昭和50年、国・県補助事業として、諫早市教育委員会が調査主体となり、長崎県教育委員会の協力を受けて、約2週間の期間で発掘調査と地形測量が実施された。

その結果、支石墓として確定的なもの20基（第3図No.1～20）、不確定なもの15基（第3図No.101～115）の計35基が確認された。このうち2基（No.3及び8）について詳細調査が行われ、ともに下部構造が土壙であることが確認された。遺物では、朱を塗布した夜臼期の小型壺片（供献土器）や刻目突帯の壺口縁片（表採資料）などが出土し、支石墓の築造年代が縄文時代晚期終末であることを示している。石器では、石鎌・彫器・扁平打製石斧などが出土している。

調査の成果は、昭和51年に報告書として刊行され、遺跡の内容について広く知られることになった。風観岳支石墓群は、標高200mという高所に立地し、大野台支石墓群（糸町町・昭和60年国指定）や狸山支石墓群（佐々町・昭和33年県指定）などが立地する県北地域と、原山支石墓群（北有馬町・昭和47年国指定）が立地する島原半島地域をつなぐ位置で確認された点で注目され、また規模的にも大野台や原山に次ぐものである。

諫早市教育委員会では、県文化課（現：学芸文化課）と協議を行い、調査期間が短期であった昭和50年の調査では支石墓が分布する全体域の捕捉が十分になされているとは言い難いとの結論により、不明確であった支石墓群の明確な分布範囲、群の構造性、下部構造、築造時期などについて追求し、国指定のための要件を具備することを主目的として、平成9年度から発掘調査に着手した。調査の実施にあたっては、まず、事業の目的と内容の説明及び発掘調査の承諾を得るために、破籠井町・下大渡野町で各1回ずつ、調査予定箇所の地権者に対する説明会を開催した。

2. 調査組織

平成9年度から13年度調査における調査組織については下記のとおりである。

教育長	立山 司 (平成9年4月1日～平成12年9月30日)
	前田 重寛 (平成12年10月1日～平成14年3月31日)
教育次長	田中 司郎 (平成9年4月1日～平成10年8月31日)
	崎田 晃生 (平成10年9月1日～平成11年3月31日)
	田嶋 将 (平成11年4月1日～平成14年3月31日)
文化課長	國井 政武 (平成9年4月1日～平成14年3月31日)
課長補佐	山田 豊 (平成9年4月1日～平成10年3月31日)
	下川 政子 (平成10年4月1日～平成11年3月31日)
	山口 廣義 (平成11年4月1日～平成14年3月31日)
参事補	秀島 貞康 (平成9年4月1日～平成14年3月31日 調査担当)
主任	内田 紀代子 (平成11年7月1日～平成13年3月31日)
事務職員	川瀬 雄一 (平成9年4月1日～平成14年3月31日 調査担当)
埋蔵文化財調査員	古賀 力 (平成9年4月1日～平成14年3月31日 調査担当)
調査指導	橋本 幸男 (平成9年4月1日～平成14年3月31日 調査担当)

第2節 遺跡の立地と環境

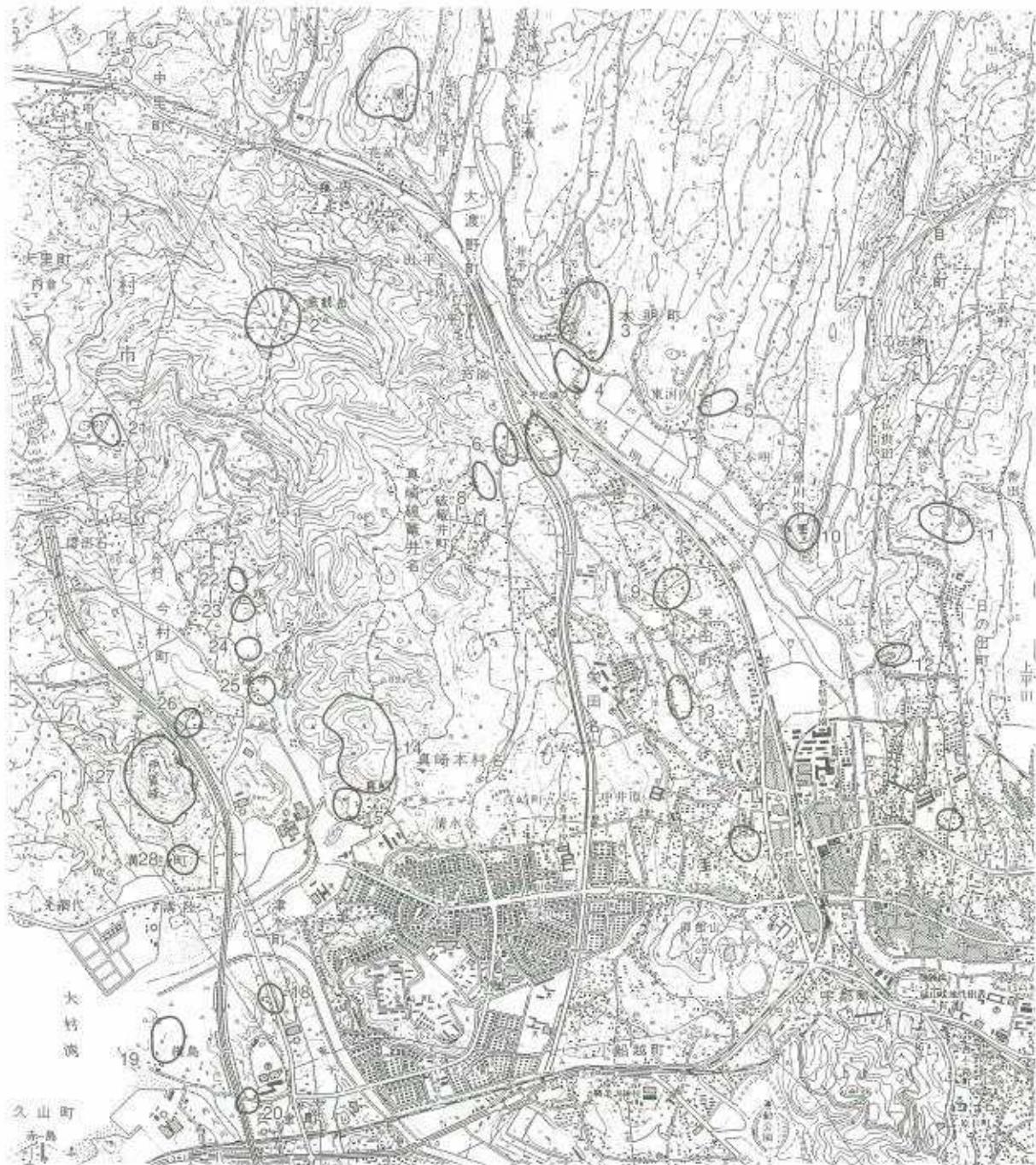
1. 遺跡の地理的環境

諫早市は長崎県本土部のほぼ中央部に位置し、長崎、島原、西彼杵半島の結節部にあり、東は有明海・西は大村湾・南は橘湾の三方を海に面した地峡部にある。風観岳支石墓群は大村市と接する市の西部、標高236mの風観岳（日野見嶽）南側鞍部に位置する。地質的には、古第三紀層の基盤を玄武岩が被覆して溶岩台地を形成し、その後の侵食により丘陵化したものである。山頂には玄武岩の露頭が見られ、付近一帯には支石墓の上石と見紛うような石が多数存在しており、この地が支石墓築造にあたり、石材供給地として適していたと思われる。

支石墓群の立地としては、県北地域の大野台・狸山・小川内の各支石墓群のように、海岸線あるいは平野部をのぞむ標高25～60mの低丘陵上、というのが一般的であるが、風観岳支石墓群は、原山支石墓群（標高250m）と同じく高所に立地す



第1図 諫早市位置図



第2図 周辺遺跡分布図 (国土地理院発行1/25,000地形図「諫早」を使用)

名 称	時 期	名 称	時 期
1 尾和谷城（闇城）跡	中世	15 真崎西遺跡	旧石器
2 風觀岳支石墓群	縄文・弥生	16 永昌遺跡	縄文
3 平松城跡	中世	17 金谷遺跡	中・近世
4 平松城跡根小屋跡	中世	18 西佐竹遺跡	縄文
5 本明寺遺跡	古墳	19 貝津横島B遺跡	縄文
6 下峰原遺跡	旧石器・縄文	20 浜田遺跡	旧石器・縄文
7 上峰原遺跡	旧石器・縄文・近世	21 鹿越遺跡※	旧石器・縄文
8 下峰原高場遺跡	旧石器・縄文	22 善福寺遺跡※	旧石器・縄文
9 八天下遺跡	旧石器～弥生	23 多々良川B遺跡※	旧石器・縄文
10 本明石棺群	古墳	24 多々良川A遺跡※	縄文
11 上横址遺跡		25 蓬藏寺遺跡※	旧石器・縄文
12 折山頭遺跡		26 迫ノ山遺跡※	旧石器～弥生
13 上打越遺跡	旧石器	27 伊賀峰城跡※	中世
14 真崎城跡	中世	28 溝陵遺跡※	旧石器・縄文

※は大村市

第1表 周辺遺跡地名表

る点に特徴を有する。

風観岳麓の破籠井町から市境の本遺跡にかけて緩やかに登る長崎街道（約1.5kmの区間を「大村街道」の名称で昭和52年に市の史跡として指定。市境までの標高差約120m）は、長崎～小倉間の長崎街道全区間を見渡しても、往時の面影が特に良く残った自然散策路で、現在でも江戸時代の旅人の気分を体感できる。近年の街道歩きブームも手伝って、休日ともなると「峠越え」の人々に出会うことがある。支石墓群は自然と歴史に満ちた、縁豊かな山奥に眠っている。

2. 周辺の遺跡と歴史的環境

長崎街道は、江戸と長崎を結ぶ街道で、九州の入口小倉から長崎に至る、九州で最も重要な街道であり、長崎奉行・幕府の役人・諸大名・オランダ商館長・商人・文人・維新の志士が、さまざまな思いを胸に駆け抜けた、新しい日本を生み出す原動力とも言える街道であった。前述の大村街道は大村（大村藩）～諫早（佐賀藩諫早領）間の山越えのルートで、この峠は、太田南畝『小春紀行』（1805・文化2年）には「日の尾峠」、古河古松軒の『西遊雜記』（1783・天明2年）・伊能忠敬『測量日記』（1812・文化9年）には「日野峠」と記されている。麓から市境に至るほぼ中間地点には「日野（大渡野）番所跡」が残っている。大村藩と佐賀藩諫早領の藩境を画する境石がほぼ大村市と諫早市との市境に分布しているが、大村藩側が丸塚、諫早領側が四角塚を交互に築き、『大村郷村記』によると塚数108となっている。現存数は35基ほどである。このうち、当時の鈴田・破籠井・大渡野村の三方を画する塚は「三方塚」と呼ばれ、一辺がおよそ4.5mの三角形で、最大の藩境塚である。

街道の上り口には、下峰原遺跡、下峰原高場遺跡の両遺跡が所在する。下峰原遺跡は昭和49年に諫早北バイパス（現在の国道34号線）建設に伴い長崎県教育委員会が、また平成8年に長崎県住宅供給公社による諫早西部団地造成に伴い諫早市埋蔵文化財調査協議会が、それぞれ発掘調査を行っている。旧石器～縄文時代にかけての遺跡で、晩期の埋甕が出土している。下峰原高場遺跡は平成12年に諫早西部団地造成に伴い諫早市埋蔵文化財調査協議会が発掘調査を行った、旧石器～縄文時代にかけての遺跡である。旧石器を主体とし、ナイフ形石器・台形石器・細石刃など3万点を越える遺物が出土している。風観岳支石墓群と同時期の縄文時代晩期の遺物も出土しているが、両遺跡相互の関連については現段階では明らかにしえない。

古墳時代初頭の本明石棺群（昭和52年市指定史跡）は6基があり、棺内から刀子などの鉄製品が出土している。古代では西海道が、長崎街道とはほぼ同じルートを通っていたと思われる。

中世になると、大村領と接するという地理的・軍事的要因から、周辺にはいくつかの城が築かれる。尾和谷城（開城）は諫早領主西郷純堯の部将尾和谷軍兵衛によるもので、平成11・12年度の範囲確認調査で建物遺構や青花・青磁などが出土した。真崎城は同じく西郷氏の支城で、戦略拠点である津水港に近接して作られた。大村氏の伊賀峰城に相対する番手城の役割を持つと思われ、土壘や空堀などが良好な状態で残っている。平松城は本明川を挟んだ対岸にあり、土壘・石壘・矢通・空堀などが配された厳重な構造を持つ。

第Ⅱ章 調査の成果

第1節 調査の概要

1. 調査の概要

確認調査は当初3年の予定であったので、まず、支石墓が分布していると想定される範囲を3地区に分割し、1年目（9年度）は長崎街道の両側の地域を、2年目（10年度）は初年度の北側の風觀岳山頂を含む地域を、3年目（11年度）は初年度の南側の地域を各年度の調査対象範囲とした。支石墓群の基数・分布範囲の確定を主目的としていたため、付近に無数に存在する上石様の石の中から、いくつかを抽出し、実測後、チェーンブロックを使用して上石を持ち上げ、下部構造の有無を確認した。発見時以降、上石が持ち去られた例があるとの話を聞いており、下部構造のみが残存することもありうるため、トレンチを設定して捕捉を行った。

3年目までの成果としては、まず1年目にSA-1を確認した。下部構造に箱式石棺を有する支石墓であったが、上石までがほぼ完全な状態で残っていたこと、昭和50年に詳細調査を行った2基の下部構造がいずれも土壌であったので、本遺跡において初めて箱式石棺を確認できたことは大きな成果であった。2年目にはSB-1～3を確認し、昭和50年調査時よりも分布範囲が北東側に拡大することが確認された。3年目にはSA-2～5を確認、特にSA-3～5は近接して築造されており、支石墓の有り方を示す好例であった。また、周辺において2年目までにはない量の遺物が出土し、この地域が分布想定範囲の中でも、調査上の重点ポイントであるとの認識を得た。

3年目の調査期間中に文化庁主任調査官が来跡し、調査の現状についての所見と調査の方向性についての指導を得た。この中で、現状では既に国指定を受けた他の支石墓群との際立った差異が見出せず、さらに捕捉すべき点があるとの指摘により、調査期間をさらに延長することとなった。

4年目（12年度）は2年目調査範囲の再精査を行ったが、支石墓を確認するには至らなかつた。5年目（13年度）は3年目調査範囲の再精査を行った。SA-3～5に近接して、SA-6～9の4基を確認、遺物の量も豊富であり、3年目と同様、この範囲の重要性を認識するに至った。

以上が各年度の調査概要であるが、調査範囲及び調査地点については第3図を、調査面積については第2表を参照していただきたい。

2. 層位（第4図）

調査範囲が広範に及ぶため、各地区の層位については、地域ごとに差異が見られる。概略について述べると、2層の茶褐色粘土層は縄文時代晚期の遺物包含層である。この層は、SA-3～9の複数の支石墓が見られ、遺物の種類・数量ともに豊富な3次（3-1～15）、5次（5-1～10）調査範囲と4次調査範囲の一部に見られる。黒褐色土層はその粘性により、粘質の4層と砂質の5層とに区別されるが、この層は長崎街道以南では確認できていない。7層の赤

橙色粘土層は固くしまった玄武岩の風化土であるが、風観岳山頂から長崎街道南側の1次調査範囲にかけて広範囲に見られるが、3次・5次調査範囲には見られない。9層の安山岩風化礫層はこの7層に被覆されている。9層の上層として8層の黄茶色粘質土が見られる。9層がしまりのある、大き目の安山岩風化礫を含むのに対し、この層は指頭大の礫を含み、ボロボロとしまりのない層で、遺物包含層である。3次・5次調査範囲で見られる。

最も土層が複雑なのが、山頂部であり、これは平坦にするために数度にわたって埋土造成をおこなっているためである。

第2節 遺構

1. 支石墓(第5~16図)

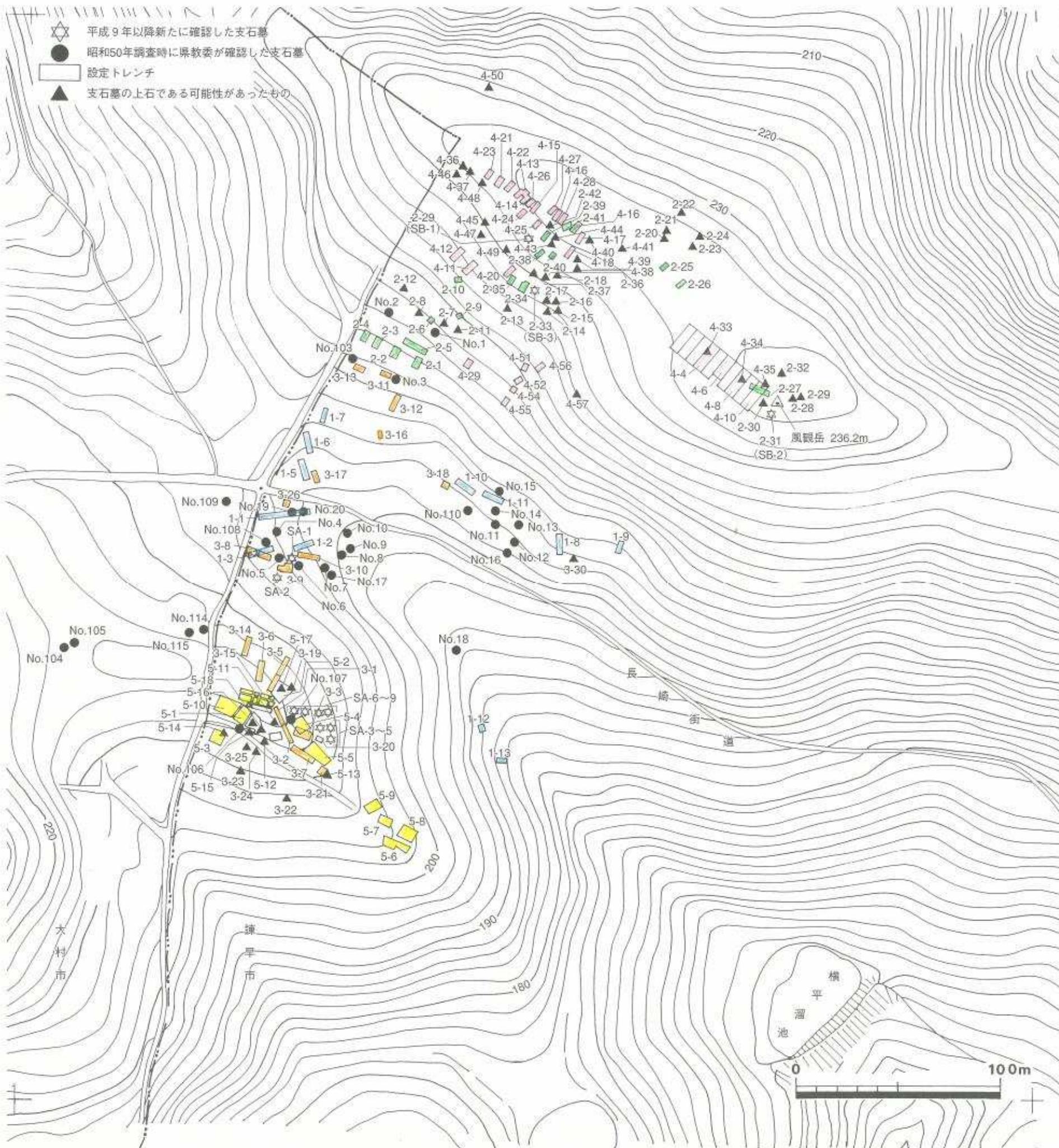
下部構造に箱式石棺を有する9基(未調査含む)と土壙を有する3基の計12基を新たに確認した。箱式石棺については、今回の調査が保存目的であったため、石棺の検出までを行い、掘り方や抜き取り痕の確認までは行わなかった。上石・蓋石については調査終了後、すべて旧状に復した。

1) SA-1(9年度・第5図)

県調査の5号に隣接して確認。上石は長さ170cm、幅100cm、厚さ20cm。低い方へややすれていると思われる。支石数は3個。石棺の内法寸法は長軸90cm、短軸45cm、深さ50cm。支石墓の構造としては、まず石棺構築のための土壙を掘り、構築後に石棺と土壙との空隙及び遺体埋葬後の棺内に掘った土を充填、石棺直上に1層目の蓋石2枚を載せ、さらに2層目の蓋石を3枚載せて、最後に上石を載せる、という工程をとっている。石棺～上石が全体的に東側に傾斜しており、地形を意識した構築法をとっている。石棺は小口材、棺床材の順に置き、最後に側壁材を置く。棺床材は複数の板石を敷いている。東側の小口材は傾斜している。小口・側壁とも1枚の板状石を用い、隙間を小板石で補っている。棺材の組合せは、小口と側壁が接する形式。主軸を東西にとる。棺内からUF・結晶片岩が各1点出土している。上石南側に3枚の立て掛け石がある。

調査年度	下部構造	法量(cm)			長軸方向	支石数	上石(cm)			出土遺物	備考
		長軸	短軸	深さ			長軸	短軸	厚さ		
SA1 平成9年度	箱式石棺	90	45	50	N-89°-E	3	170	100	20	UF・結晶片岩	
SB1 平成10年度	土壙(略円形)	100	70	30	N-30°-W	0	160	95	20		
SB2 平成10年度	土壙(長椭円形)	120	60	30	N-88°-W	1	130	100	25	C	
SB3 平成10年度	土壙(隅丸方形)	95	90	30	N-53°-W	0	120	100	20	炭化物	
SA2 平成11年度	箱式石棺	70?	50?	?	不明	不明	120	110	30		損壊
SA3 平成11年度	箱式石棺	55	30	50	N-84°-E	3	160	110	20	UF	
SA4 平成11年度	箱式石棺	70	50	50	N-87°-W	3	100	100	20	土器・C	
SA5 平成11年度	箱式石棺	未調査			未調査	未調査	未調査				
SA6 平成13年度	箱式石棺	65	30	45	N-85°-E	1	消失			土器・石鎚・猿轡・UF・F・C	
SA7 平成13年度	箱式石棺	110	30	60	N-55°-E	不明	消失			土器・石鎚・猿轡・UF・F・C	損壊
SA8 平成13年度	箱式石棺	85	35	45	N-75°-E	3	130	90	20	土器・UF・C	
SA9 平成13年度	箱式石棺	未調査			未調査	未調査	未調査			県調査分	N-127

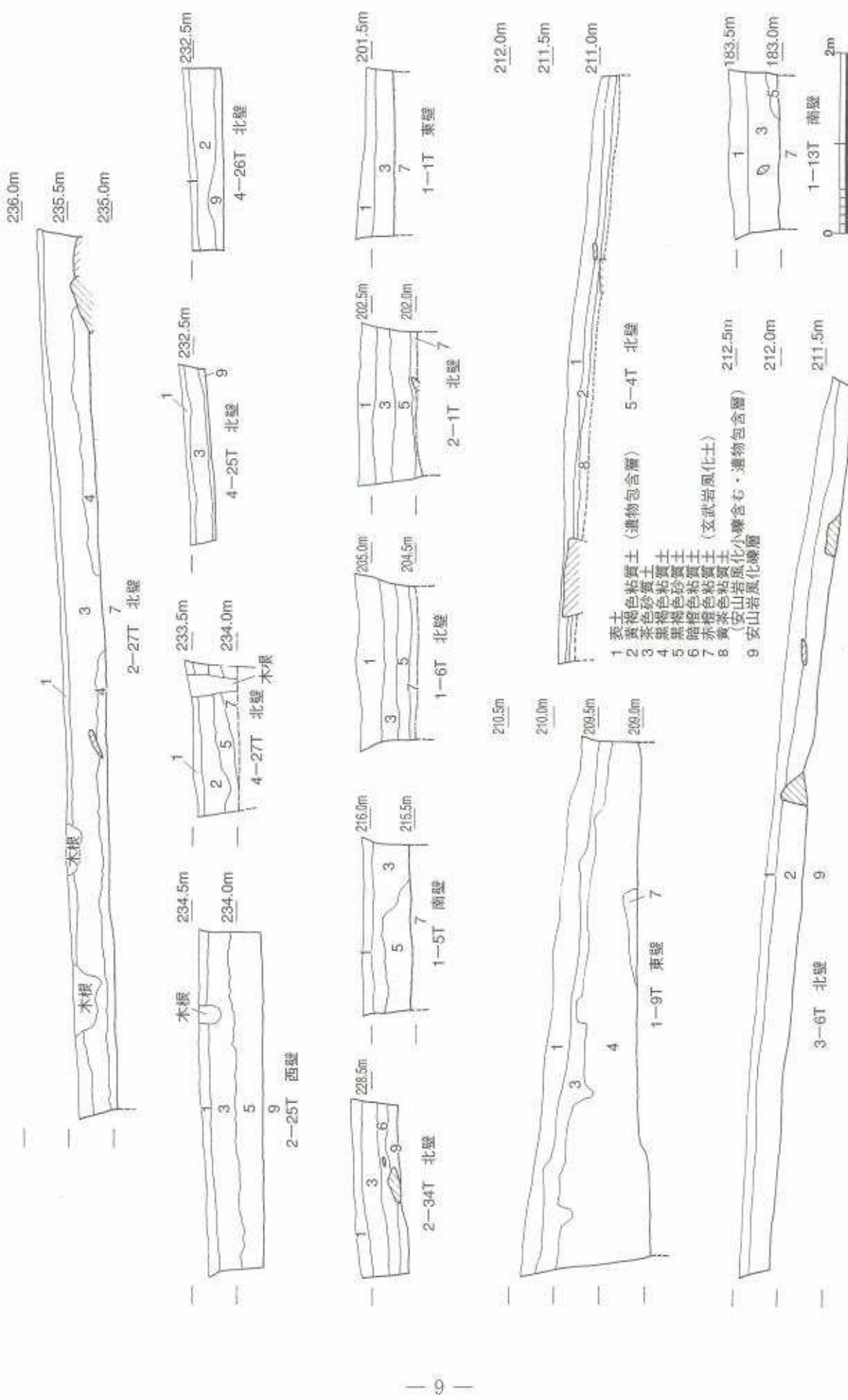
第2表 下部構造計測表



第3図 調査地点位置図 (S-1/2000) ※先頭の数字が調査年度を示す

年次	No.	種別	面積	備考
①	1	トレンチ	25	
	2	トレンチ	20	
	3	トレンチ	24	
	4	トレンチ	0	未掘
	5	トレンチ	20	
	6	トレンチ	20	
	7	トレンチ	11	
	8	トレンチ	20	
	9	トレンチ	12	
	10	トレンチ	20	
	11	トレンチ	20	
	12	トレンチ	6	
	13	トレンチ	18	
	14	トレンチ	89	
	15	トレンチ	4	
	16	トレンチ	14	
	17	トレンチ	5	
	18	トレンチ		
	19	上石		
	20	トレンチ	4	
	21	上石		
	22	上石		
	23	上石		
	24	上石		
	25	上石		
	26	トレンチ	9	
	27	上石		
	28	上石		
	29	上石		
	30	上石		
		面積合計	483	
年次	No.	種別	面積	備考
②	1	トレンチ	98	ピット群
	2	トレンチ	61	
	3	トレンチ	43	
	4	トレンチ	90	SA-6~9
	5	トレンチ	71	ピット群
	6	トレンチ	38	
	7	トレンチ	36	ピット
	8	トレンチ	46	
	9	トレンチ	26	
	10	トレンチ	84	ピット群
	11	上石		
	12	上石		
	13	上石		
	14	上石		
	15	上石		
	16	上石		
	17	上石		
	18	上石		
		面積合計	593	
年次	No.	種別	面積	備考
③	1	トレンチ	0	未掘
	2	トレンチ	0	未掘
	3	トレンチ	0	未掘
	4	トレンチ	50	
	5	トレンチ	0	未掘
	6	トレンチ	60	
	7	トレンチ	0	未掘
	8	トレンチ	75	
	9	トレンチ	0	未掘
	10	トレンチ	75	
	11	トレンチ	19	
	12	トレンチ	19	
	13	トレンチ	15	
	14	トレンチ	15	
	15	トレンチ	12	
	16	トレンチ	12	
	17	トレンチ	12	
	18	トレンチ	11	
	19	トレンチ	12	
	20	トレンチ	12	
	21	トレンチ	10	
	22	トレンチ	11	
	23	トレンチ	8	
	24	トレンチ	17	
	25	トレンチ	8	
	26	トレンチ	10	
	27	トレンチ	12	
	28	トレンチ	8	
	29	トレンチ	17	
	30	トレンチ	8	
	31	上石	SB-1	
	32	上石		
	33	上石	SB-2	
	34	トレンチ	13	土壌
	35	トレンチ	8	
	36	上石		
	37	上石		
	38	トレンチ	8	
	39	トレンチ	10	
	40	トレンチ	6	
	41	トレンチ	17	
	42	上石		
		面積合計	181	
年次	No.	種別	面積	備考
④	1	トレンチ	10	
	2	トレンチ	9	
	3	トレンチ	32	SA-3~5
	4	トレンチ	15	
	5	トレンチ	38	
	6	トレンチ	23	
	7	トレンチ	30	
	8	トレンチ	30	
	9	トレンチ	17	SA-2
	10	トレンチ	21	
	11	トレンチ	8	
		面積合計	51	上石

第3表 調査面積集計表 (面積の単位: m²)



第4図 土層図 (S-1/60)

2) SA-2 (11年度・第13図)

SA-1に隣接して確認。損壊を受け、側壁と思われる板石2枚が残存するのみである。掘形のプランが66×54cm、深さ10cmで確認された。上石と思われる石が近接している。

3) SA-3 (11年度・第8図)

上石は長さ160cm、幅110cm、厚さ20cm。低い方へややすれていると思われる。支石数は3個。石棺の内法寸法は長軸55cm、短軸30cm、深さ50cm。SA-1と同様で2層の蓋石を有する。石棺～上石が東側に傾斜しているという地形を意識した構築法をとっている点、低い方の小口材が傾いている点もSA-1と同様である。主軸を東西にとる。棺床材はない。小口・側壁とも1枚の板状石を用い、隙間を小板石で補っている。棺材の組合せは、小口材と側壁材がそれを挟み込んだ風車状を呈する。材が接する部分には小板石がかぶさる。後述するSA-8と同様に、長さに対して幅の小さい、細長い形状を呈する。棺内からUF1点が出土している。

4) SA-4 (11年度・第9図)

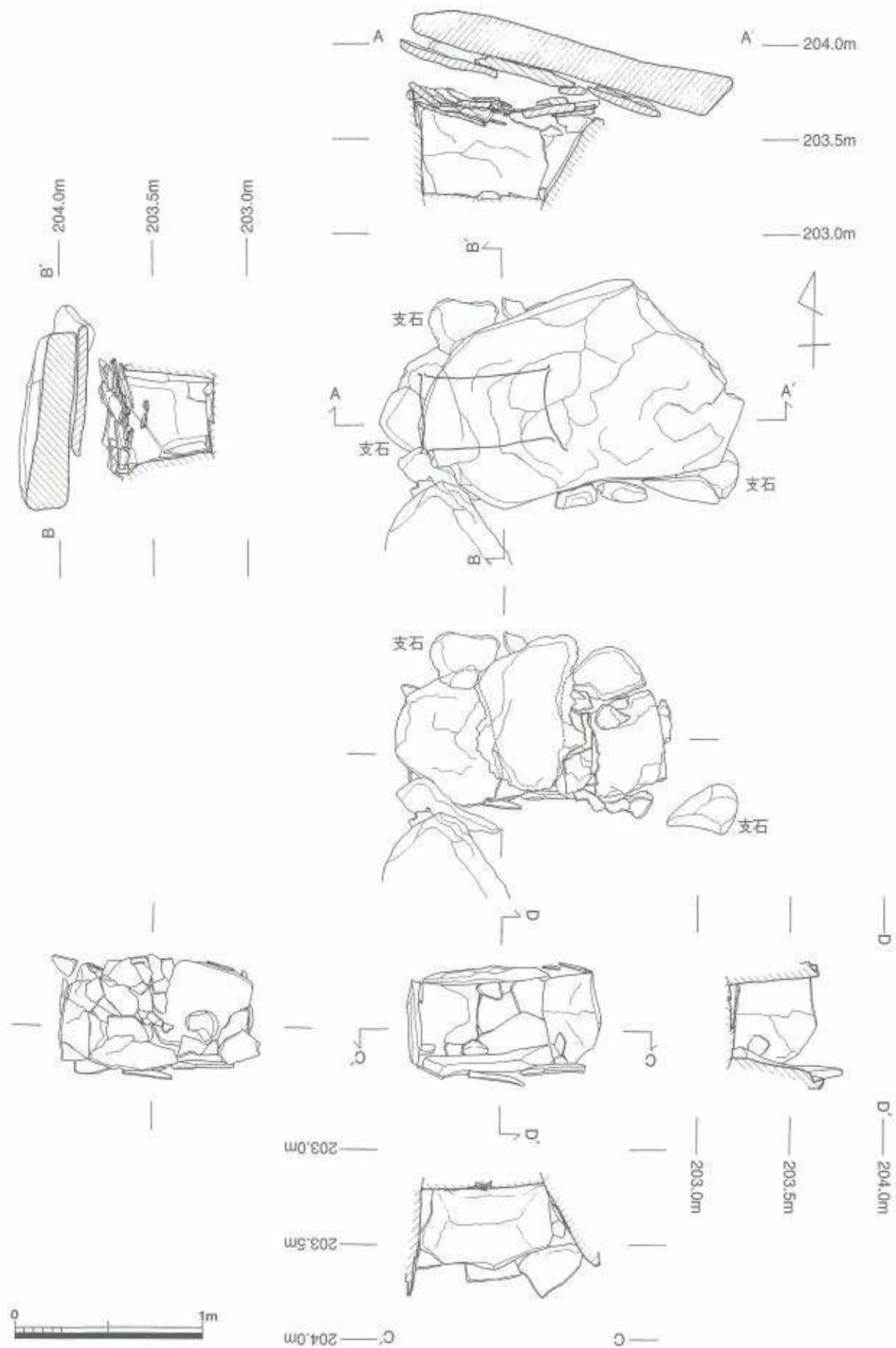
SA-3に近接する。上石は長さ100cm、幅100cmで、他の支石墓の上石が長方形を呈するのに対し、正方形に近い形状を示す。厚さは20cm。南側へややすれていると思われる。支石数は3個。石棺の内法寸法は長軸70cm、短軸50cm、深さ50cmで長軸に比して短軸が幅を有し、平面形は正方形に近い。支石墓の構造としては、SA-1・3と同様で2層の蓋石を有するが、SA-4の蓋石は厚みを有する。石棺～上石は傾きがなく、水平に構築されている。石棺は主軸を東西にとる。棺床材を有するが、SA-1と異なり、ほぼ1枚の板石でまかなわれている。西側の小口以外は棺床材に載る。小口・側壁とも1枚の板状石を用いているが、東側小口以外の3辺の内側に補強用の板石を置く。棺材の組合せは、SA-3と同じく小口材と側壁材がそれを挟み込んだ風車状を呈する。棺内から土器2点・チップ1点が出土している。

5) SA-5 (11年度)

未調査であるが下部構造は箱式石棺と思われる。SA-4の西側支石の上に上石が載っており、SA-4→SA-5の順に築造されたことが窺える。

6) SA-6 (13年度・第10図)

上石は消失し、1層目の蓋石1枚と箱式石棺のみが残存している。石棺の内法寸法は長軸65cm、短軸30cm、深さ45cm。主軸を東西にとる。棺床材を有し、東側の小口のみが載る。東側小口が2枚の板石を有する以外は小口・側壁とも1枚の板状石を用いている。側壁の長さに違いがあるため、全体的にわずかに台形状を呈する。短い方の側壁は板石をかぶせて補っている。棺材の組合せは小口が側壁を挟み込む形式。棺内から土器2点・UF4点・フレーク2点・UC(使用痕のあるチップ)2点・チップ8点・石鏃1点・搔器1点が出土している。



第5図 SA-1 支石墓実測図 (S-1/30)

7) SA-7 (13年度・第11図)

損壊が著しく、西側部分の損壊は棺床面にまで及んでいる。石棺の内法寸法は、長軸110cm、短軸30cm、深さ60cm。幅が狭く、狹小な印象を受ける。主軸を東西にとる。両側壁はともに大ぶりな板石を用いる。支石と思われるものが1箇ある。蓋石は石棺中央部へ向かっていくつにも割れているが、他の石棺の蓋石と同様の構築方法を窺わせる。搅乱を受けた棺内から、土器21点・UF 7点・フレーク14点・チップ18点・石鏃1点・赤色チャート1点が出土。

8) SA-8 (13年度・第12図)

上石は長さ110cm、幅90cmで、厚さ20cm。短軸方向の断面は扁平な長方形を呈するが、長軸方向の断面は東側が薄く、西側が分厚い形状。上石は西南方向にずれている。支石数は3個。石棺内法の寸法は長軸85cm、短軸35cm、深さ45cm。細長い長方形形状を呈し、石棺直上の1層目の2枚の蓋石上に2層目の3枚の扁平な蓋石が載るという2層構造をとる。棺床材を有し、両側壁が上に載っている。主軸を東西にとる。蓋石はほぼ斜面の傾斜に沿って構築されている。両側壁は2枚、小口は1枚の板石からなる。棺材は片方のみ小口側の側板が側壁を挟み込み、片方は側壁が小口を挟んでいる。棺内から土器1点・UF 1点・チップ1点、中蓋下埋土からUF 1点・石鏃1点が出土している。

9) SA-9 (13年度)

県調査の107号。2枚の上石が重なっている。1枚はSA-7 (13年度) の上石と思われる。これとは別の上石は下部構造が箱式石棺と思われる。

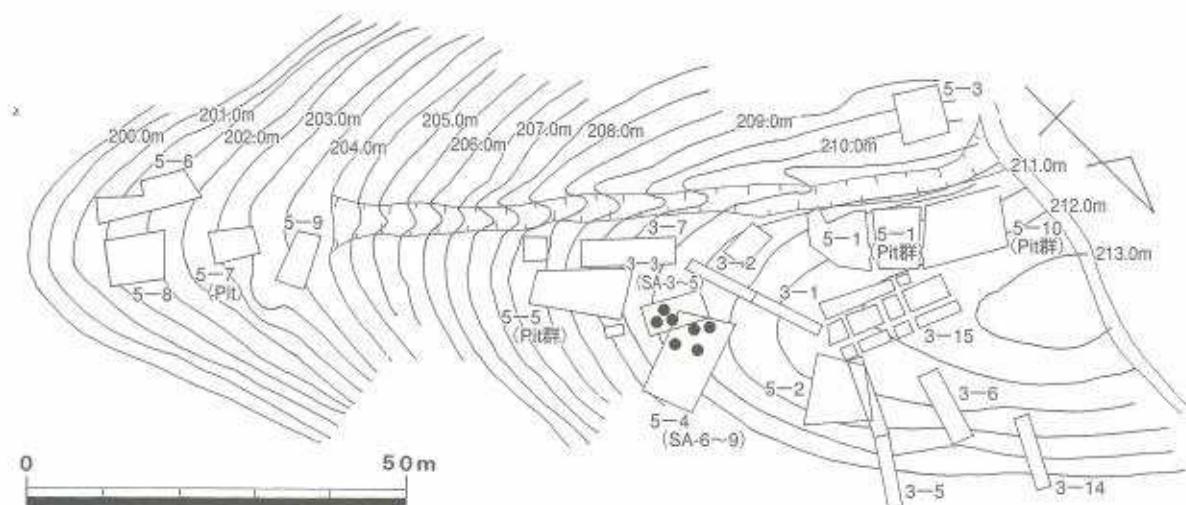
以上が、下部構造に箱式石棺をもつ支石墓であるが、これらとは別地点で確認された3基の遺構について記述する。いずれも上石の下部に、二次的に埋められた様相のある土壙があり、うち2基で遺物・炭化物の出土が見られた点、昭和50年に詳細調査が行われた3・8号の下部構造が土壙であった点から考慮して、現時点において支石墓の下部構造として認定した。

10) SB-1 (10年度・第14図)

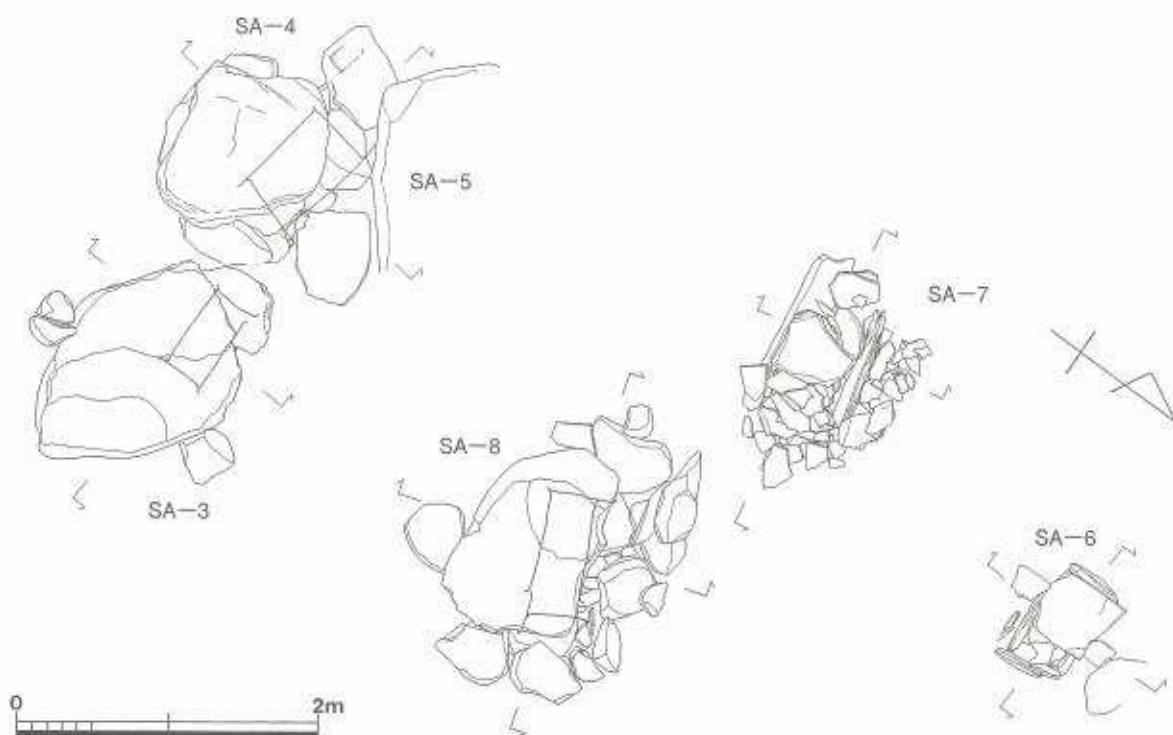
長崎街道から風観岳山頂へと続く斜面を、ほぼ登り切った地点にある。160×95×20cmの隅丸長方形の扁平な上石を有する。上石は北側にずれる土壙平面形は長軸100cm、短軸70cmの略円形。深さ30cm。土壙底部は平坦であるが、北側にわずかに段差がある。主軸を南北にとる。

11) SB-2 (10年度・第15図)

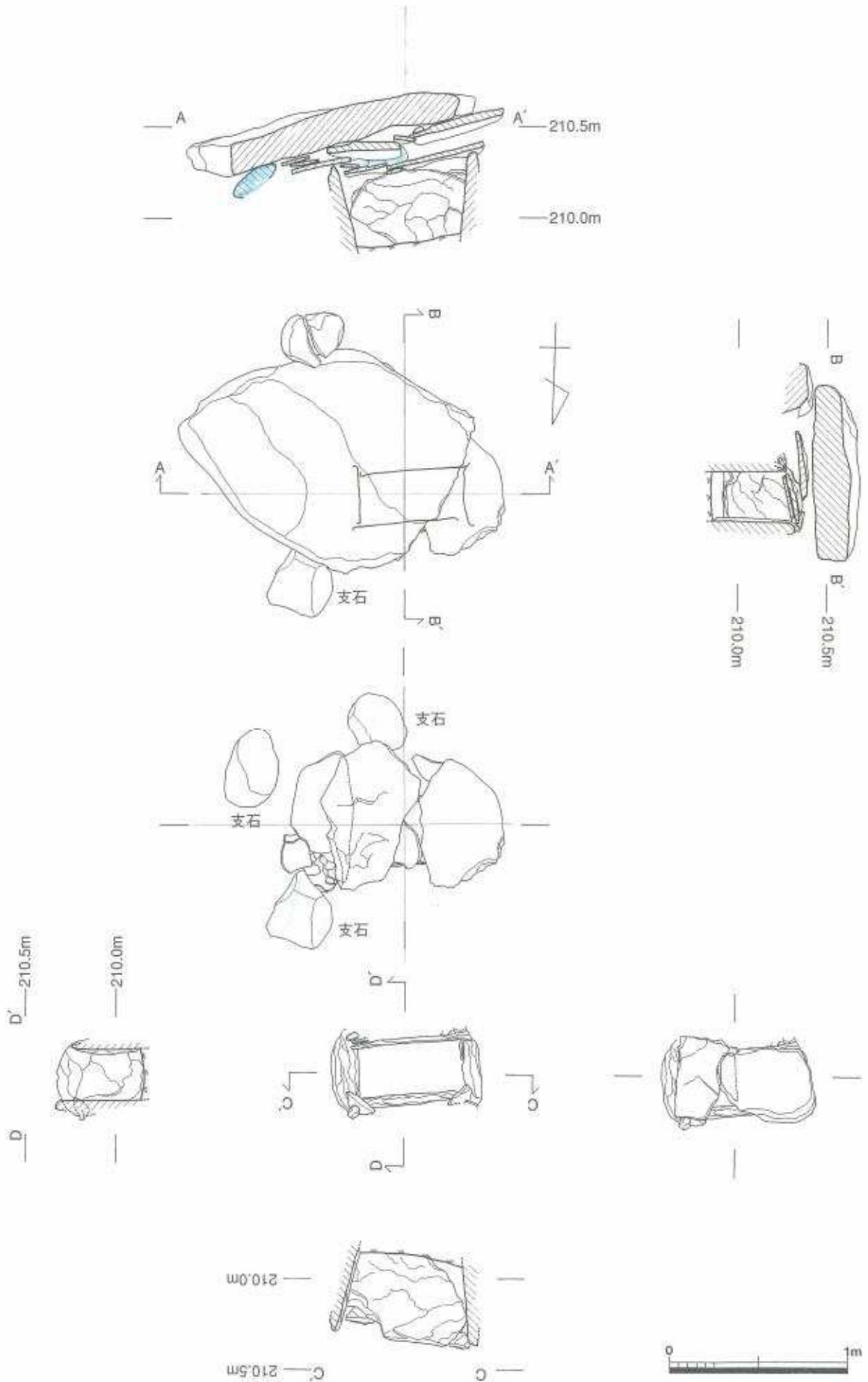
風観岳山頂に位置する。130×100×25cmの台形状の上石を有する。上石はわずかに西側にずれる。上石の下部には拳大の小礫が一定の範囲で見られる。土壙平面形は長軸120cm、短軸60cmの長楕円形。深さ30cm。主軸を東西にとる。土壙底部は平坦。土壙の東側に位置する塊石が



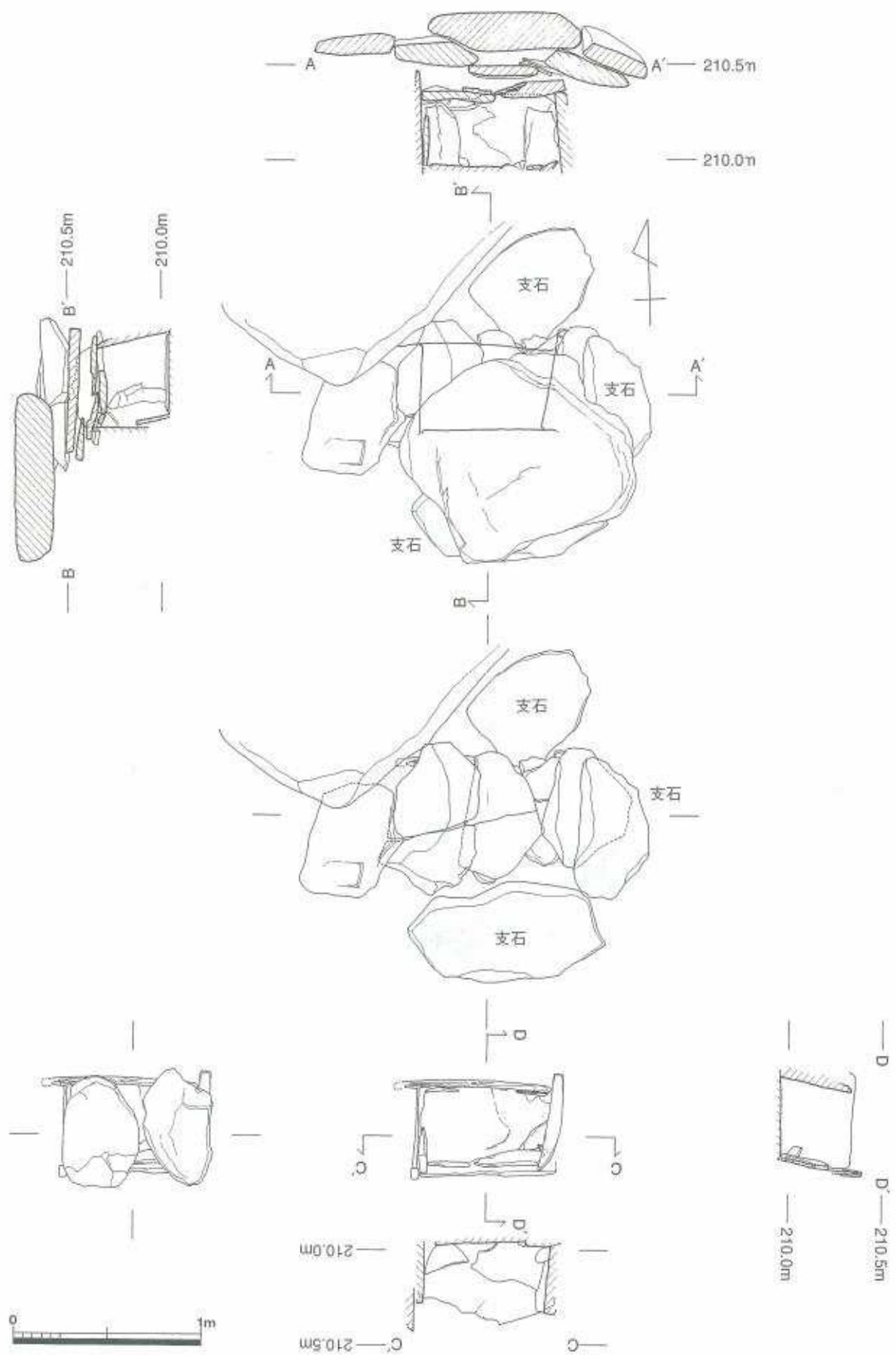
第6図 3次・5次調査地点トレンチ配置図 (S-1/1,000) ※ () 内は出土遺構



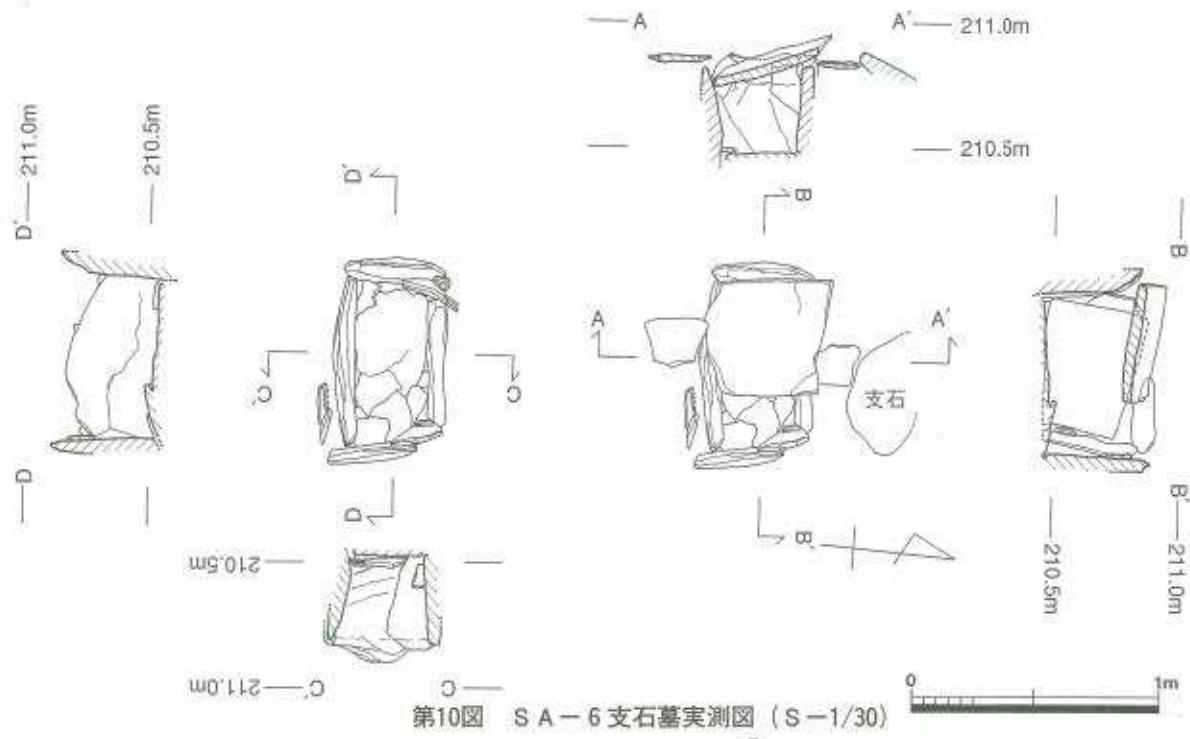
第7図 SA-3～8支石墓配置図 (S-1/50)



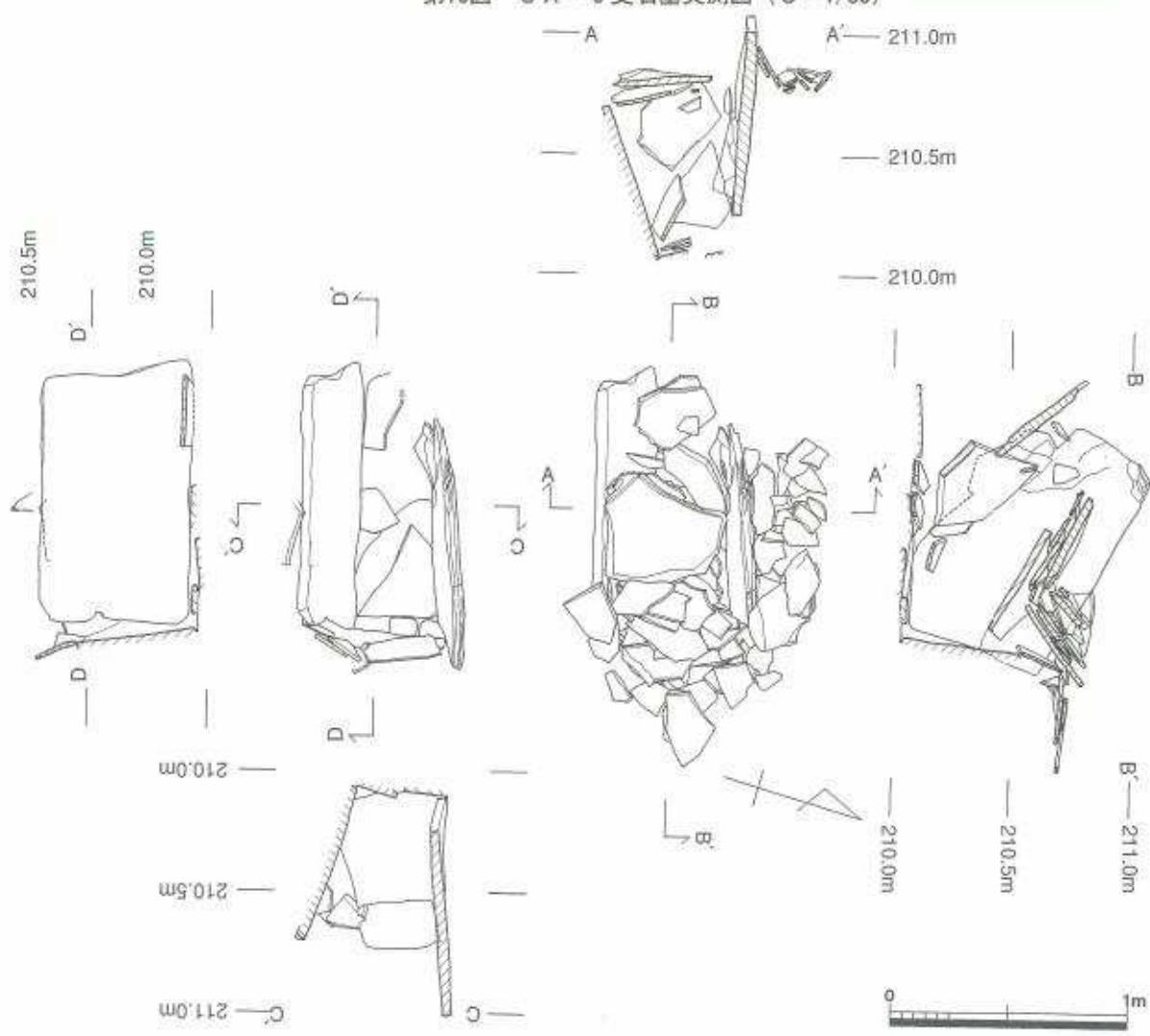
第8図 S A - 3 支石墓実測図 (S-1/30)



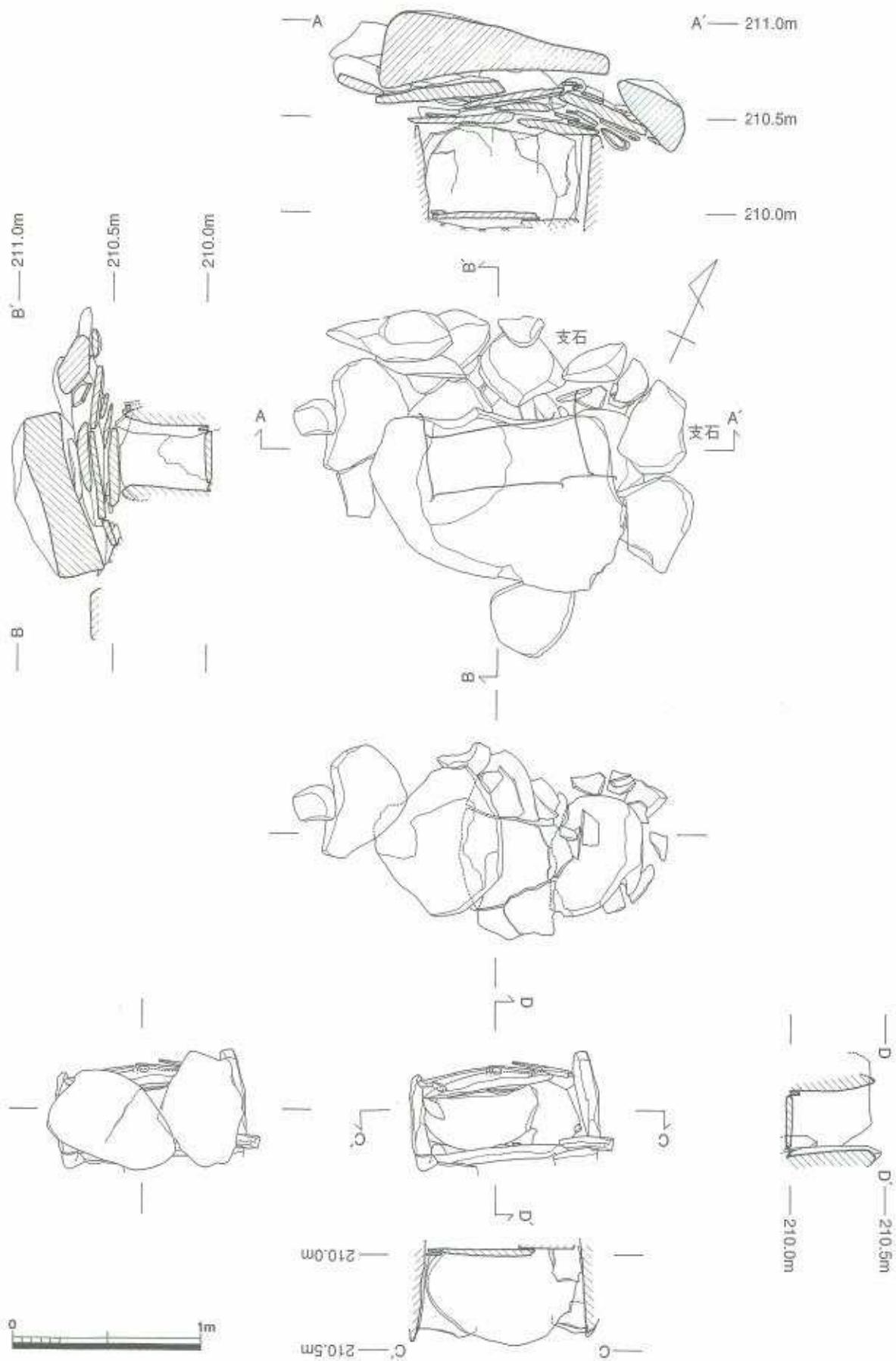
第9図 SA-4 支石墓実測図 (S-1/30)



第10図 SA-6 支石墓実測図 (S-1/30)



第11図 SA-7 支石墓実測図 (S-1/30)



第12図 SA-8 支石墓実測図 (S-1/30)

支石と思われる。土壙内から微量の炭化物が出土している。

12) SB-3 (10年度・第16図)

SB-1の近辺にある。120×100×20cmの隅丸方形の扁平な上石を有する。上石は東側にずれる。上石の西側に塊石を立て掛ける。土壙平面形は長軸95cm、短軸90cmの隅丸方形。深さ30cm。主軸を北東にとる。土壙底部は平坦。上石の下部には拳大の小砾が一定の範囲で見られる。土壙内から微細な黒曜石チップが1点出土。

2. ピット (第17~20図)

複数からなるピット群を検出した。掘り込み面はいずれも8層の安山岩風化小砾を含む黄茶色粘土層である。平面形がさまざまであるが、ピット相互の位置関係についても明確な意図を読み取ることはできない。数基で遺物の出土が見られた。

1) 5-10T (第17図)

トレンチ北端で計13基が出土。平面形は、円形(3・7・8・10)、楕円形(1・2・4~6・9・13)、不定形(11・12)のもがある。10・11の断面は二段である。1で土器片、12でチップ・土器片が出土。

2) 5-5T (第18図)

9基が出土。平面形は円形(1・8)、楕円形(2・3・6)、不定形(4・5・7・9)のものがある。4・5の断面は二段である。1でUF・チップ、3でUF・石鎌・搔器、4でUF、5でフレークが出土。

3) 5-1T (第19図)

トレンチ北端で4基が出土。平面形は、楕円形(1)、不定形(2・3)、円形(4)で、2~4の断面は二段である。2・3は直径40cm。

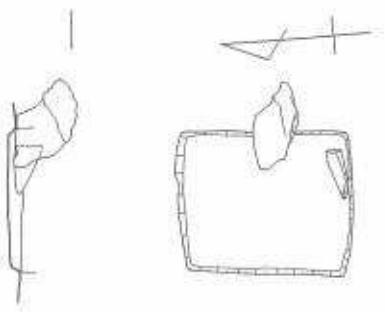
4) 5-7T (第20図)

トレンチ東端で1基が出土。平面形は円形で、断面は二段である。

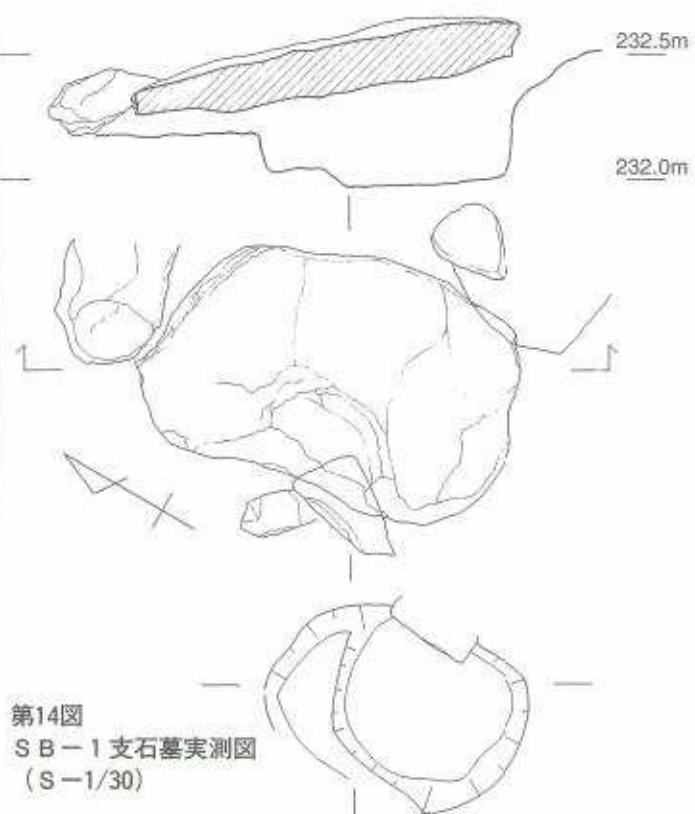
3. 土壙 (第21図)

2-34Tで出土。安山岩風化砾層(地山)に掘り込まれた東西に広がる土壙で、南北方向は最大で135cm、東西方向はトレンチ東壁に及んでおり未検出であるが、検出部分のみで190cmを測る。検出面から底部までの深さは35cm。土壙内覆土は2層に分層され、1層-炭化物・焼土を含む黒色土、2層-黄茶色粘質土(地山再堆積土)である。1層で土器片・チップが出土した。

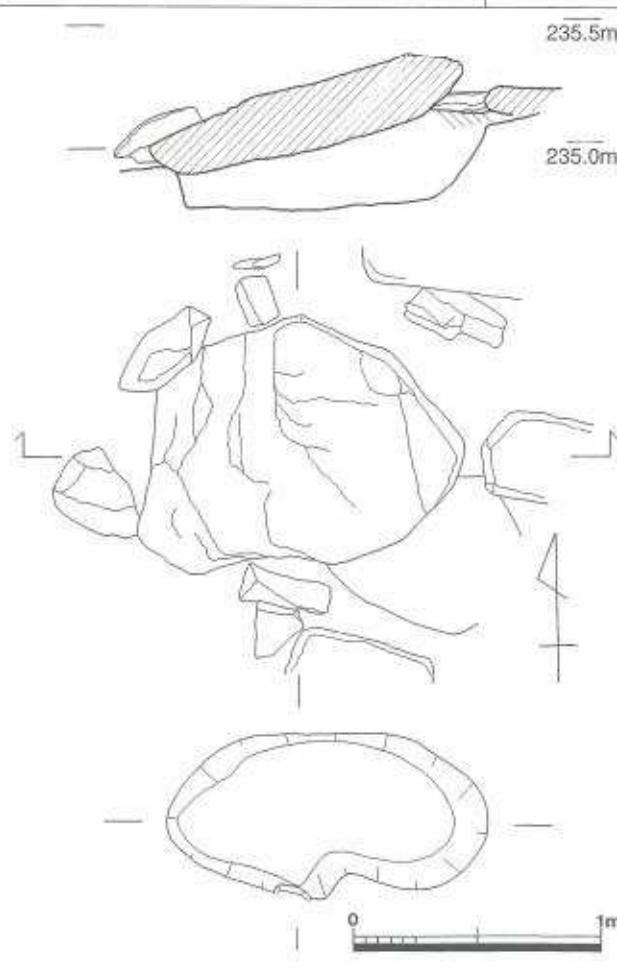
土壙内には並列する2基のピットがあり、ピット1は円形で底部及び北側部分が不明瞭。深さは20cm。ピット2は楕円形で深さ20cmを測る。



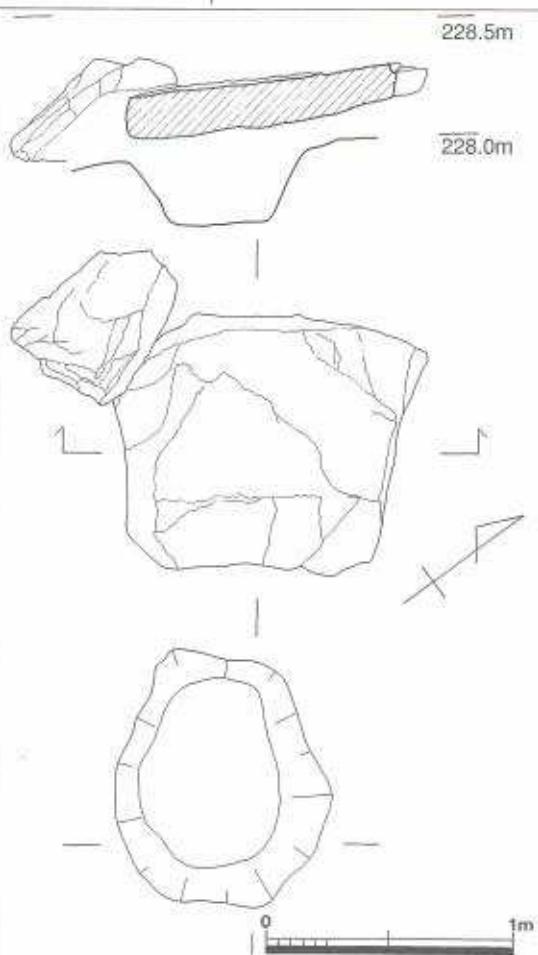
第13図 SA-2支石墓実測図
(S-1/30)



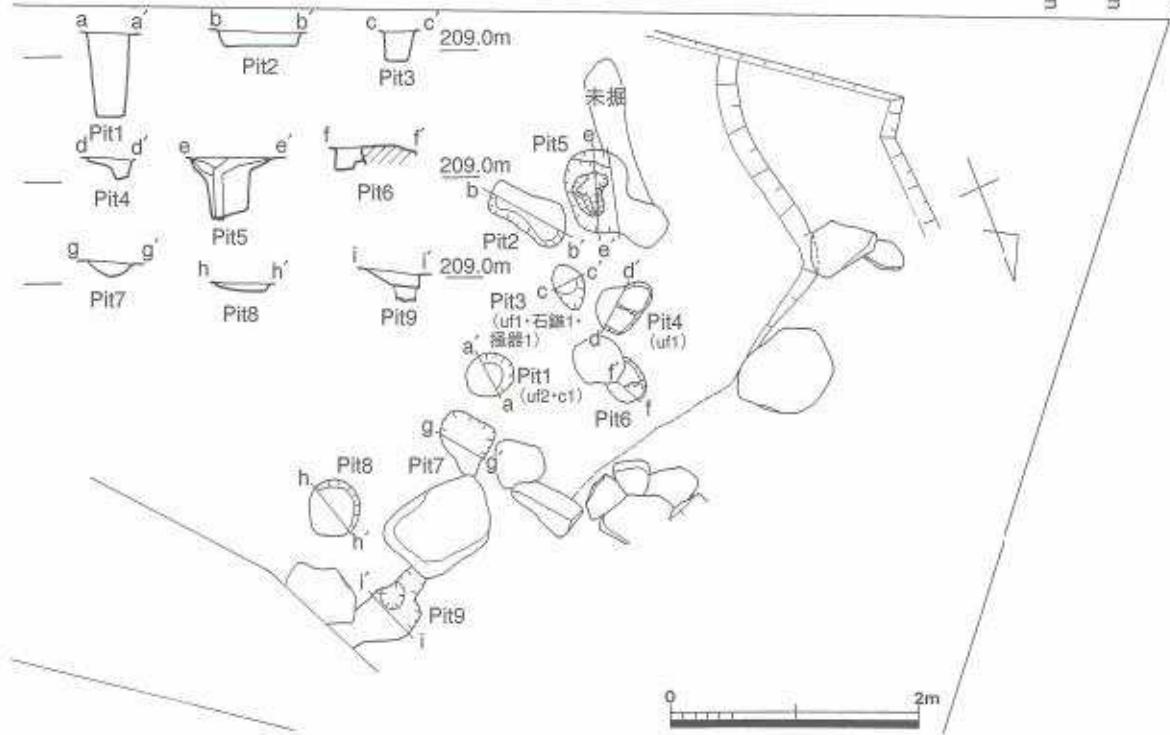
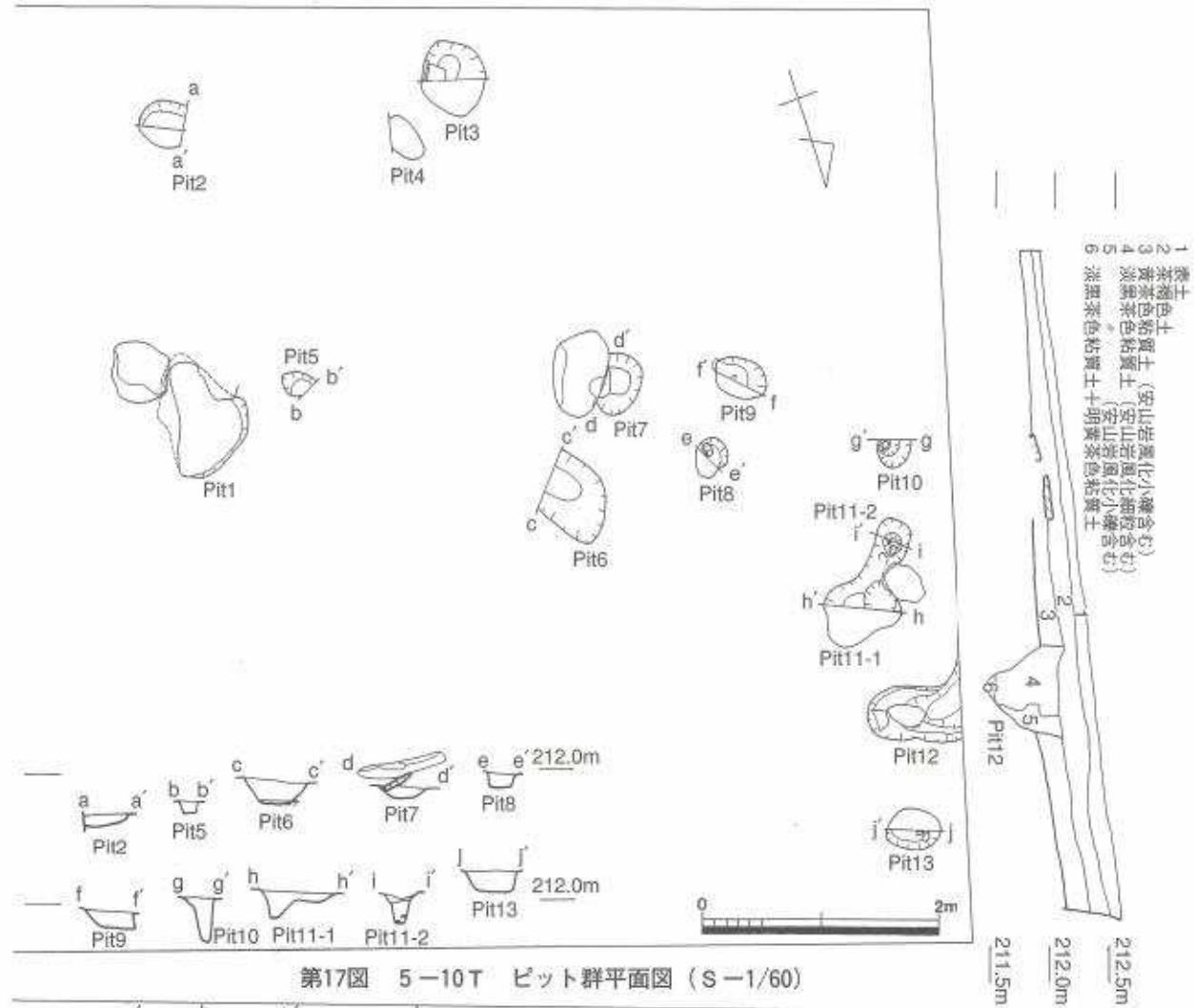
第14図
SB-1支石墓実測図
(S-1/30)

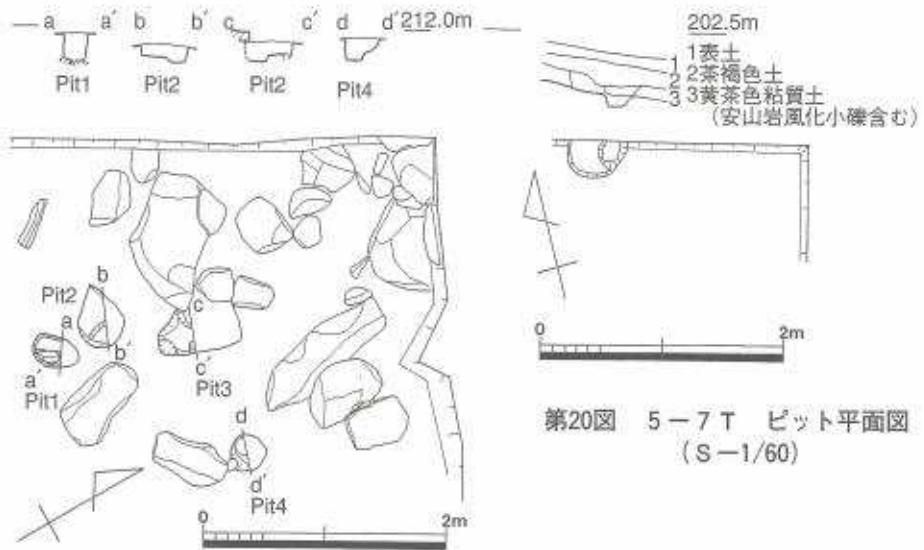


第15図 SB-2支石墓実測図 (S-1/30)

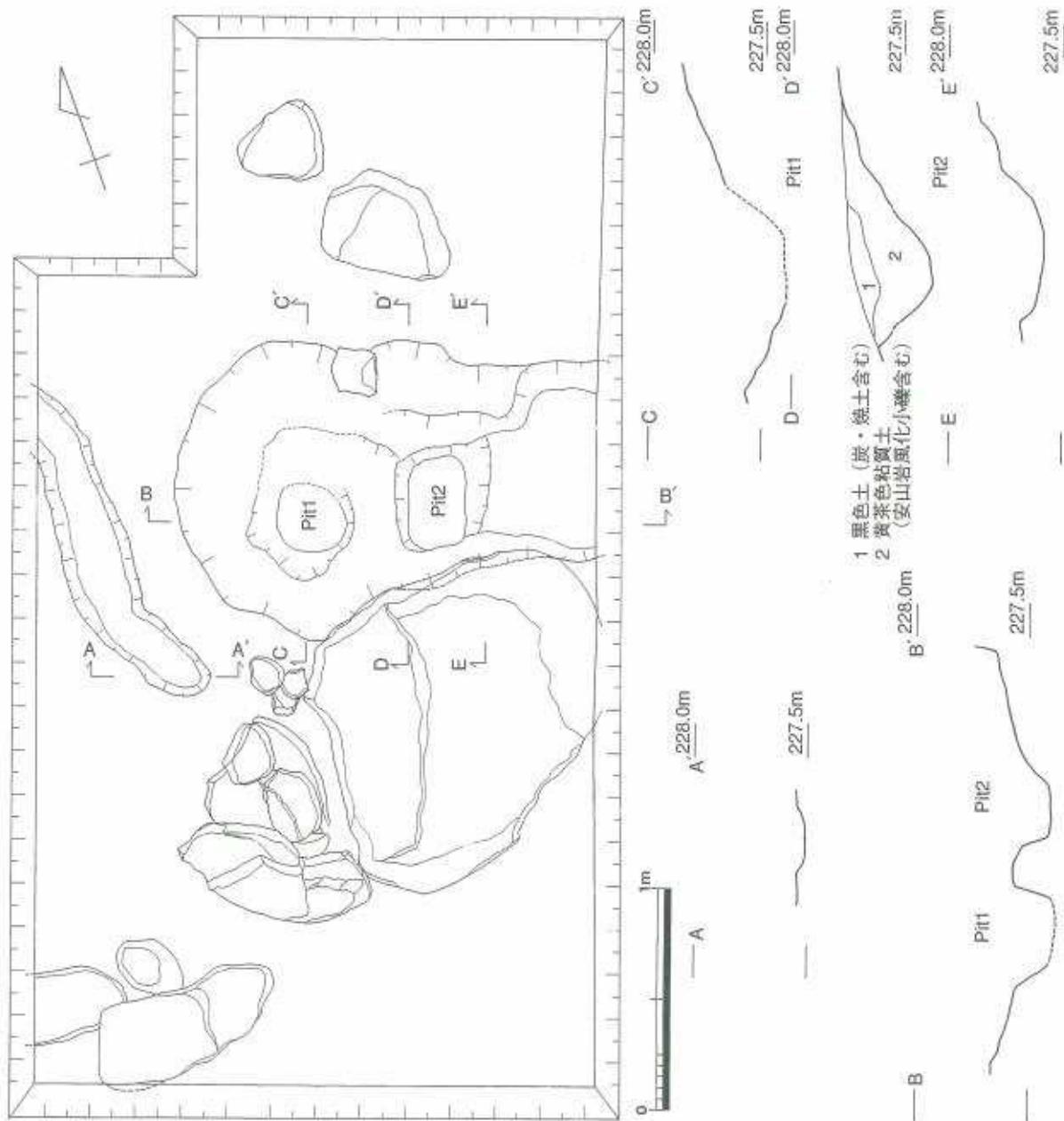


第16図 SB-3支石墓実測図 (S-1/30)





第19図 5-1T ピット群平面図 (S-1/60)



第20図 5-7T ピット平面図 (S-1/60)

第21図 2-34T 土壌実測図 (S-1/30)

第3節 遺 物

5か年の調査での出土遺物数は、土器・陶磁器類988点・石器（碎片・剥片を含む）5,133点の計6,121点である（近・現代の資料は含まない）。年次別・土器の時期別・石器の器種別の出土数については第4表のとおりであるが、土器・石器ともに支石墓が群集する3・5次調査範囲で内容・数量ともに豊富に出土している。紙面の都合上、全てについては掲載しえないが、まず土器・陶磁器類及びその他の遺物、次に石器の順で記述を行い、最後に調査範囲ごとの出土傾向の概要について記述する。

調査年次	土器・陶磁器																			石器															
	縄文	弥生	土師	中晩	近世	年次別計	調査年次	ナイヤ	MB	石器	尖頭型	石錐	石槍	骨錐	集入石器	石錐	圓錐	錐錐	角錐状	異形	DC	UF	石斧	破刃器	石製品	丹焼灰	石墨	ハサマ	すり石	白玉	フレー	石核	チップ	原石	年次別計
1	78			1	79	1	1	1	4			3								13			4	1						30	5	30	2	33	
2	39				39	2	1	1			1	2	2							3	17	1								1	23	3	49	2	105
3	147			5	152	3		1	38	1		43	8	6	2	3				56	157	1								328	49	936	7	1,636	
4	91				91	4	1	11	1		3	2	1						1		27	4		4	1					24	7	36	3	126	
5	512	1,107	1	6	627	5	1	67		5	126	43	14	5	1	1	1	1	61	394	8	1	1		1	1	1	1	513	89	1,812	22	3,172		
時期別計	867	1,107	1	12	988	4	1,121	1	1	5	176	55	23	7	4	2	1	123	608	14	1	9	2	1	1	1	1	938	153	2,863	36	5,133			

第4表 遺物集計表

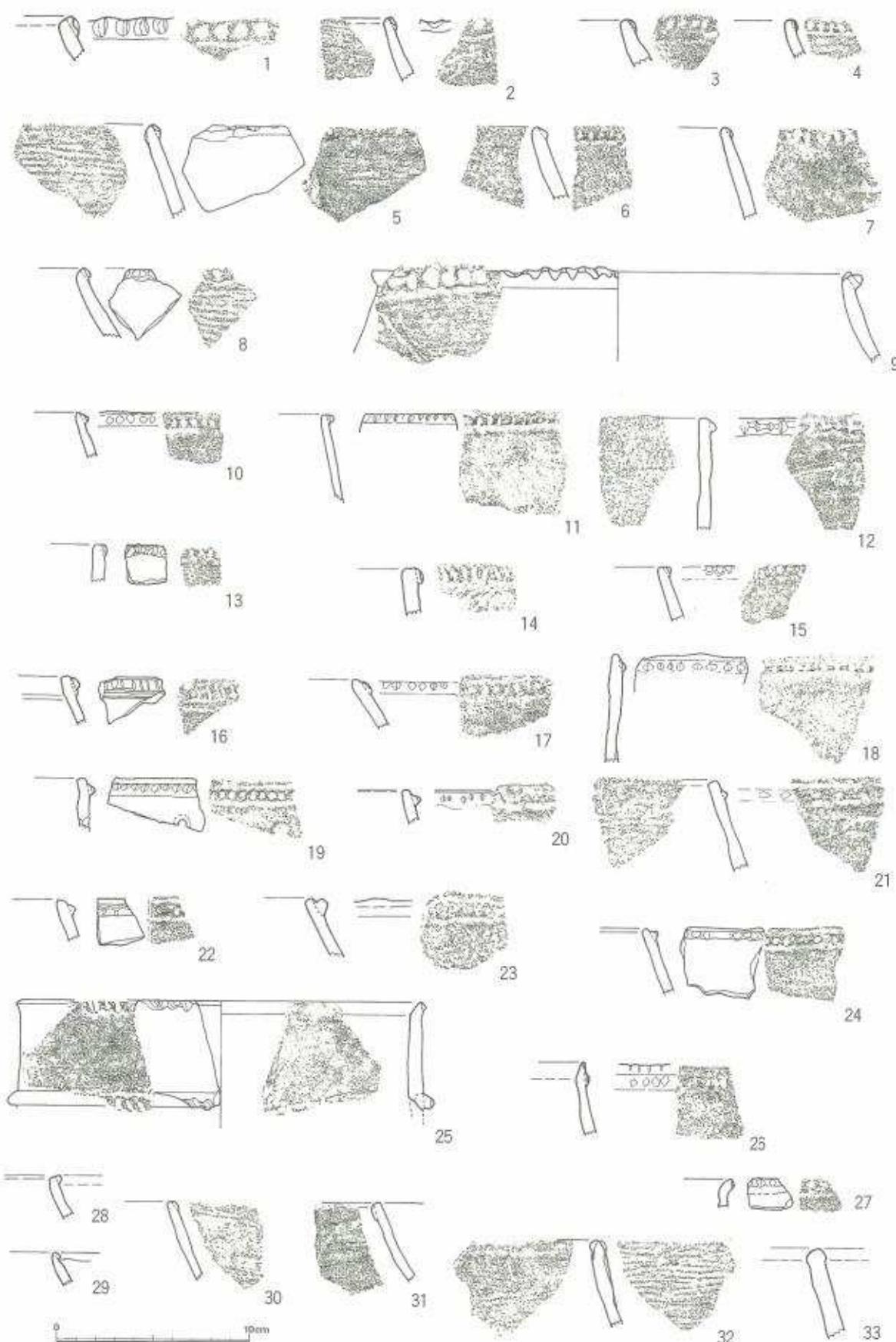
1. 土 器

①縄文晩期～弥生前期の土器

1) 刻目突帯のある壺類の口縁（第22図・1～26）

1は1-8T出土。口縁端に突帯を付け、指頭で刻目を付ける。刻目の中に爪あとが残っている。胎土に長石・角閃石を含む。2は同じく1-8T出土。やや上方から刻目を付ける。胎土は1と同様で、内外面ともに条痕がある。3も1-8T出土で左下がりの刻目を付ける。胎土は1・2と同様である。4はSA-4の棺内から出土。右下がりの刻目である。外面に条痕が残る。5は1-5T出土。刻目が頂部にかかる。内外面ともに条痕が残り、外面には媒が付着している。6は5-5T出土。磨耗しており詳細は不明。左下がりの刻目を付ける。7は5-5T出土で小さめの突帯に浅い刻目を付ける。胎土に石英粒・雲母を含む。8は3-30T出土。外面には明瞭な条痕がある。内面は条痕をナデ消している。9は5-3T出土。8と同様の口縁形状であり、やや上方から棒状の工具で押えたような刻目をつける。10は5-6T出土。小型で器壁が薄い。口縁端が尖り気味で三角形の突帯を付ける。刻目は浅い。11は5-5T出土。口縁端は平坦である。鋭い工具で左下がりの刻目を入れる。胎土に石英・雲母・角閃石を含む。12は3-5T出土。端部に三角形状の突帯を付け、不規則な刻目を入れる。13は小型の器形。内外面とも条痕をナデ消している。刻目は刺突によって付けられたように観察される。3-6T出土。14はSA-7の棺内からの出土であるがSA-7はかく乱が著しく、付近からの混入と思われる。口縁頂部は平らで、小さめの刻目を付ける。15は5-5T出土。14に似た形状であるが、やや上方から押えた刻目である。胎土に石英粒・雲母を含む。

16～24は突帯が口縁端より少し下にある。16は3-15T出土。口縁端よりわずかに下がった位置に突帯を付け、鋭い刃物で刻んだような細長い刻目がある。17はSA-7周辺からの出土。



第22図 土器実測図① (S-1/3)

磨耗が著しい。刻みは浅い。18は5-5T出土。下方に突帯が外れたような痕がある。19は口唇部が角ばり、刻目は菱形で整っている。内外面とも十分にナデ消しており、条痕等の痕跡は認められない。補修孔のある唯一の資料である。20は5-7T出土。刻目はあいまいであるが、全体にシャープな作りである。胎土に石英・雲母を含む。21は5-2T出土。内面に横方向の条痕が残る。外面は風化が著しい。22は3-6T出土。調整は不明。突帯が波打つような押さえ方をしている。23はSA-7調査時に出土。刻目の残りは悪い。胎土に石英・角閃石を含む。24は3-6T出土。内外面ともにナデ消し。胎土に石英粒・角閃石・雲母を含む。

2) 口唇部に刻目のある口縁 (第22図・25-27)

25は5-2T出土。直口の器形で、口縁端より約5cm下に突帯を付け、口唇と突帯両方に刻目を入れた資料である。口縁の内側を斜めに切り取り、外側へ「く」の字状に曲げている。如意形口縁の祖形を思わせる器形であるが、類例を見ない。内外面ともにナデ仕上げで、胎土に石英粒・角閃石・雲母を含む。焼成は良好で硬い。復元口径は約21cmである。26は5-5T出土。口縁内側をカットし尖らせている。口縁端より5mmほど下に低い突帯を付け、刻目を入れる。口唇部にも細かな刻目を入れている。風化が進んでおり調整等不明。27は如意形口縁の小破片で口唇外側に刻目を付ける。刻目の残りが悪い。5-5T出土。25・26・27の各タイプは、それぞれ1点のみの出土である。

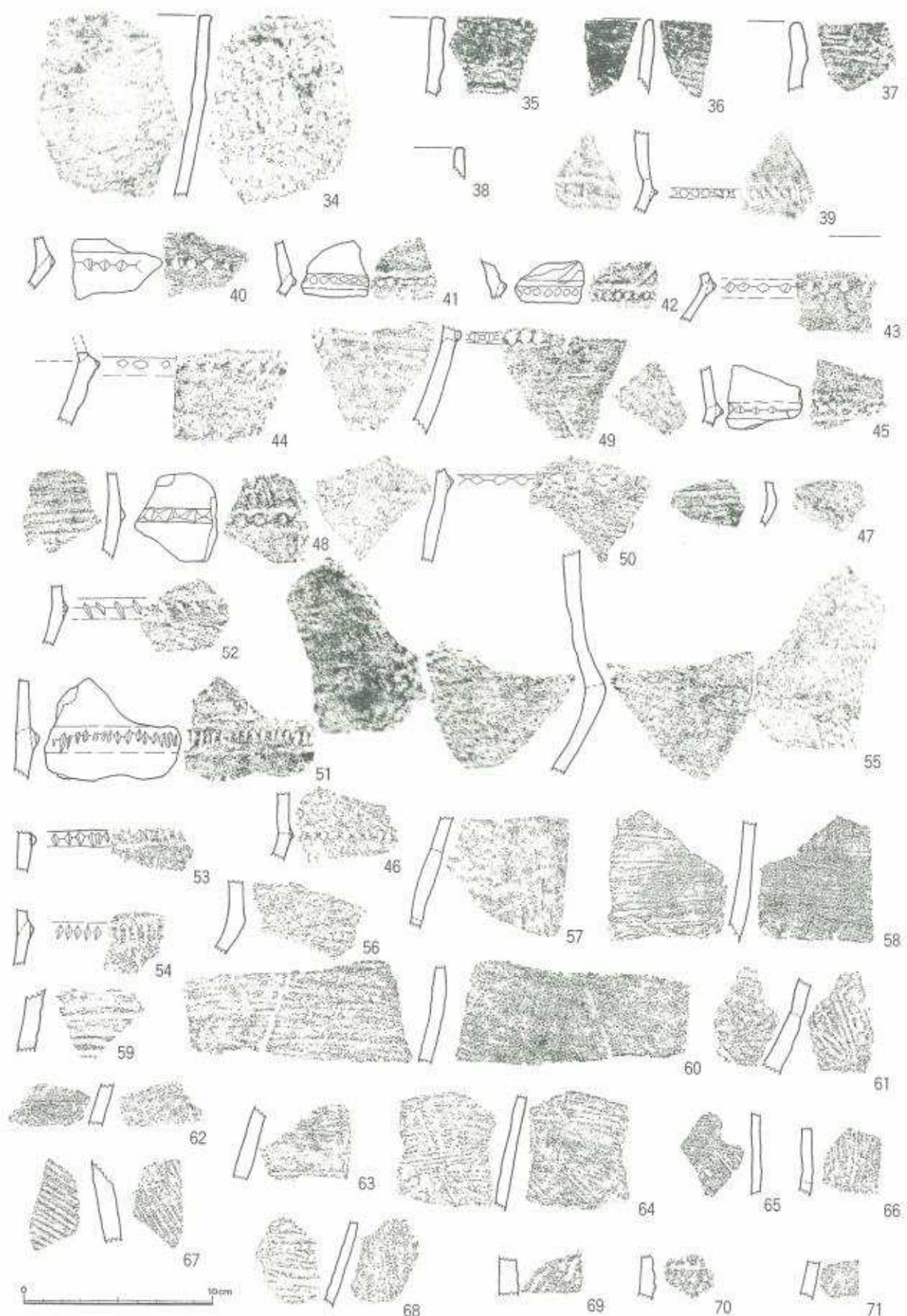
3) その他の口縁資料 (第22図・28-33、第23図・34-37)

28は5-3T出土。口縁端に突帯を付けるが刻目はない。29-31は口縁を折り返している。29は5-3T出土。小型である。30はやや内傾する口縁の端部を外側に折り返し、ふくらみを持たせる。胎土に石英粒を含む。31は30と似た形状であるが内側に折り返す。胎土に長石・角閃石を含む。两者とも3-6T出土。32は5-3T出土。やや内傾する口縁で内外面ともに明瞭な条痕がある。33も5-3T出土で口唇部がややふくらむ。調整は条痕をナデ消している。

34は5-7T出土。わずかに外開きになる口縁で、頂部は平坦。口唇をつまんだように作り、一部を折り返す。外面には多くの炭化物が付着している。内面は幅1cm強の工具で横方向に削ったように見える。35は口縁が曲線を描くが、全形を想定できない。36は3-10T出土。口唇を丸く作る。外面には条痕があり、内面は板状の工具で調整している。37は風觀岳山頂部の4-10T出土。外面は条痕。内面は条痕をナデ消している。山頂部一帯からは、刻目突帯のある土器は出土していない。38は5-3T出土。小型の器種で、口縁頂部を平坦に作る。

4) 刻目突帯のある甕胴部 (第23図・39-54)

39-47は屈曲部に刻目突帯を付けた資料である。39はSA-4の石棺内から出土。保存状態のよい資料である。接合部より少し下に三角形の突帯を付け、棒状の工具で押さえ、刻目としている。胎土に雲母・白色粒子を含み硬質である。SA-4は全く、かく乱を受けておらず、この土器片は意識的に入れられたか、支石墓築造時に混入した確率が高い。SA-4が造られた時期に近接した資料と思われる。40-45はほぼ同タイプの破片である。40は3-1T出土。41・42は3-6T出土。43は5-10T出土。44は5-6T、45は5-3T出土。46は屈曲の程



第23図 土器実測図② (S-1/3)

度が小さい。47は小型で、内面に条痕がある。かなり痛んでおり、刻みは消えかかっている。48～54は直線に近い胴部に刻目突帯を付けている。48は3～6T出土で内面に条痕がある。49は刻目が深い。5～2T出土。50は5～4T出土。浅い刻目である。51は5～5T出土。ヘラ切りによると思われる不規則な刻目がある。52は右下がりの細長い刻目を付け、胎土に石英・雲母を含む。5～5T出土。53は小破片のため詳細不明であるが、51と同工の刻目を付けている。54は磨耗が著しい。浅い刻目である。

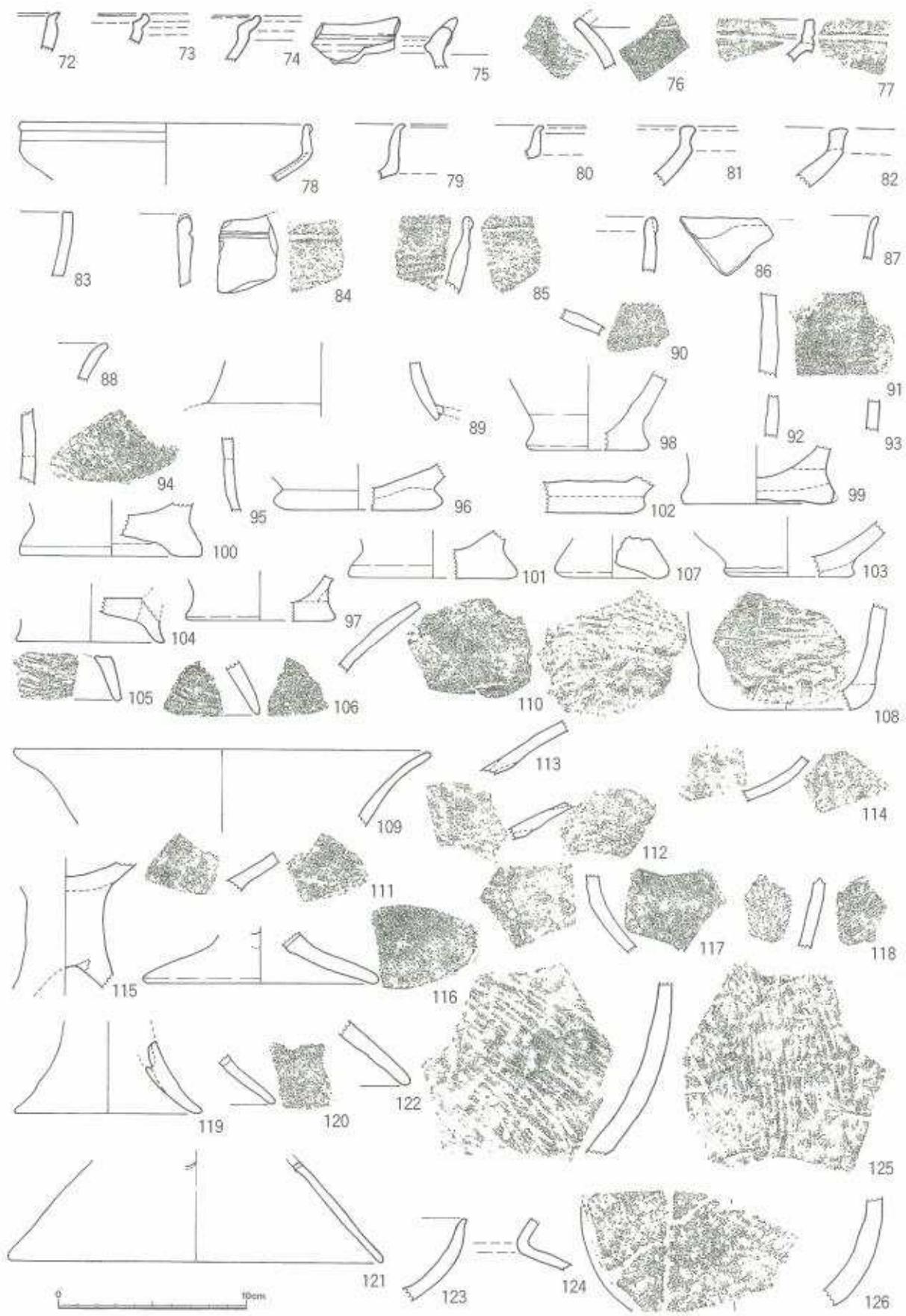
5) その他の甕胴部破片(第23図・55～71)

55～58は、風観岳山頂部から西側にいたる高所に設定したトレンチから出土。55は比較的大きい破片であるが、表面の痛みが激しい。胴下半に屈曲を付けている。内外面ともに条痕の痕跡がある。胎土に長石・角閃石・結晶片岩の粒を含む。4～15T出土。56は4～10T出土。57は4～24T出土。内外面ともに剥落が著しいが、条痕があったと思われる。58は4～22T出土。内外面ともに条痕が残る。外面下方には、炭化物が付着している。胎土に長石・角閃石・結晶片岩を含む。59～71は刻目突帯を持つ土器とともに出土した胴部破片である。59はSA-8から出土しており、外面に条痕がある。60は1～5T出土。外面に炭化物が付着している。61は5～10T出土。底部近くの破片である。62はSA-7の棺内より出土。内面は磨き。63は1～8T出土。外面には条痕が残るが、内面は丁寧に消されている。64は5～3T出土。薄い作りで、内外ともに明瞭な条痕がある。65は5～5T出土。薄い作りで、内面に板状工具によると思われる調整痕がある。胎土に石英粒・雲母を含む。66は5～5T出土。外面に条痕があり、胎土に石英粒・雲母を含む。67は1～8T出土。内外面ともに条痕がある。68は3～6T出土。内面の条痕が明瞭である。69・70は5～10T出土。いずれも小破片であるが、外面に組織痕かと思われる凸凹がある。71は3～9T出土。肌色で外面に刷毛目が認められる。

6) 鉢形、碗形の資料(第24図・72～88)

72は2～34T出土。このトレンチでは焼土ピット(第21図)が検出されており、土器片が21点出土しているが、図化できたのはこの1点のみである。風化が著しく、表面が皮状に剥落している。73は5～1T出土。研磨されているが、外面は肌色、内面は灰黒色である。74は4～6T出土。これも研磨され、橙色である。75は2次調査時の表採資料である。2連の突起を付けた口縁の一部と思われる。76は口縁部が接着面で外れている。内外とも良く研磨され灰褐色である。1～8T出土。77は5～10Tのピットから出土した土器で角の多いシャープなつくりの口縁である。ヘラ磨きによる仕上げで内外とも淡褐色。長石・角閃石を含んだ胎土である。78はSA-4の棺外から出土。口唇部を玉縁状に作る。表面剥落のため、調整は不明。胎土に石英・雲母を含む。復元口径15.6cm。79・80は5～6T出土で78と同形と思われる。80には、外面に沈線状の凹みがある。81・82は厚手の鉢の口縁かと思われるが、全形は不明。81は胎土に角閃石が目立つ。4～10T出土。82は5～10T出土。

83～87は、おおむね鉢ないし碗の口縁になると思われる。83は1～8T出土。内外面とも研磨され、口唇頂部がわずかにへこむ。84は口縁外面に1条の沈線をめぐらす。5～3T出土。



第24図 土器実測図③ (S-1/3)

85も5-3T出土。口唇部を玉縁状に作る。86は1-8T出土。口唇を外側に折り返している。87は3-6T出土。かなり小型の土器と思われ、薄作りである。内外面ともナデ仕上げ。88は3-6T出土。中間がやや厚くなる口唇部の破片で、鉢形土器の口縁と思われる。

7) 壺形および丹塗関連資料（第24図・89~95）

89は壺形土器の頸部破片である。内面に、胴部との継ぎ目が残っている。外面は研磨の後、赤色顔料を塗っている。内面は、ナデ仕上げ。胎土に長石・角閃石が認められる。3-6T出土。90も3-6T出土。肩部の破片と思われ、二重沈線による山形文の一部が残っている。目視では丹塗の痕跡は認められない。91~93は丹塗土器の細片で、3点とも胎土に石英・雲母を含む。いずれも保存状態が悪い。91は5-3T、92は1-8T出土。93は風観岳山頂部の4-10T出土。両面に丹塗の跡がある。94・95は5-5T出土。ともに外面に丹塗の痕跡があり、胎土に石英・雲母を含む。95は内面が荒い仕上げで高坏の脚部と思われる。

8) 底部資料（第24図・96~108）

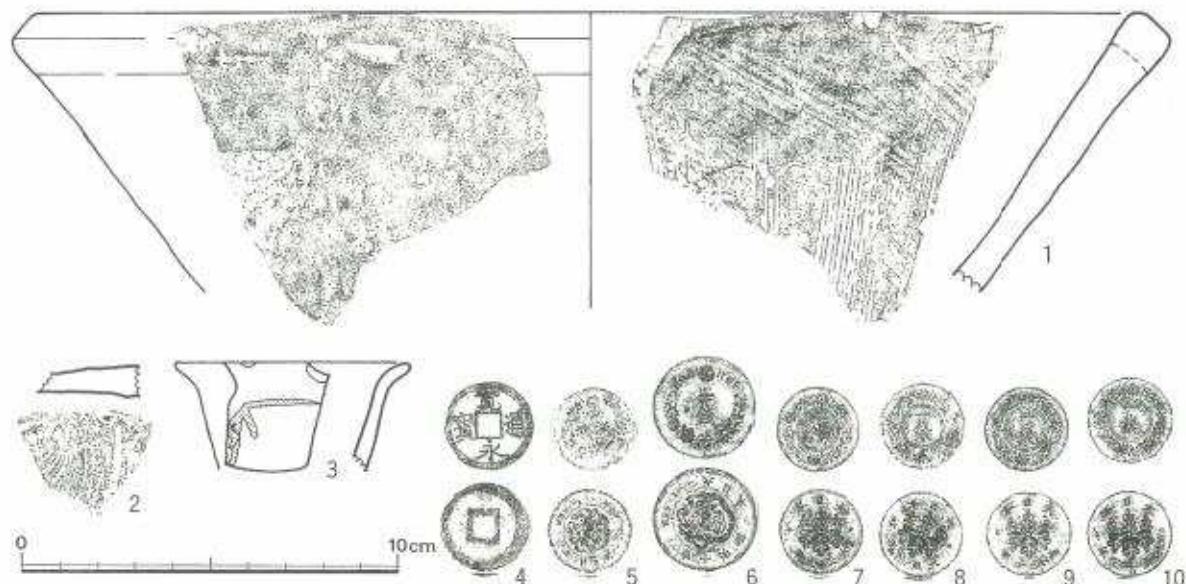
96は円盤を貼り付けたような底部である。5-3T出土。復元径は約9cm。97は5-6T出土。復元径約8cm。98は5-5T出土。ヘラで搔き取ったような整形痕がある。胎土に、石英・雲母を含む。99は5-7T出土。荒い作りである。100は風観岳山頂部の4-6T出土。抉りを入れ、接地面がドーナツ状となっている。101は3-6T出土。復元径約9cm。102はSA-8付近の出土。非常に荒い粒子を含む。103は壺形の底部かと思われる。復元径約7cm。5-5T出土。104~107は高坏の脚部になるかもしれないが、小破片のため判断しにくい。105は5-3T出土。接合部で外れている。106・107は1-8T出土。108は平底でコップ形と思われる資料である。復元底径約9cm。

②古墳時代の土器（第24図・109~126）

109・110、113~116、121は5-7Tから出土。109は大きく外反する高坏の口縁である。内外面とも表面が剥落して調整は不明であるが、外面に丹塗りの痕跡がある。淡赤橙色で、胎土に長石・角閃石を含む。復元口径は22.2cm。110は109によく似ているが、胎土に雲母を含んでおり別個体と判断される。外面にヘラ磨きの跡がある。113は109に続く破片と思われる、色調、胎土とも同様である。内外面ともヘラ磨き。114は碗形の坏部の破片と思われる。胎土に雲母を含む。115は中実部の多い脚部で、色調、胎土から109・113に続くと思われる。上面の坏部にはヘラ磨きがあり、内面には製作時に生じたと思われる隙間がある。116は低平な脚部の破片で、穿孔がある。121は裾が大きく広がるタイプで、穿孔がある。111は5-9T出土。110に近い細片である。112は5-7T出土。坏部の破片で内外面ともヘラ磨き。117は5-6T出土。脚部の破片で外面ヘラ磨き。118~120は5-7T出土。118は部位不明。内外とも刷毛目がある。119・120は脚部の破片。120は穿孔の一部が残っている。122は5-6T出土。脚部の破片と思われる。123は手捏ね風の口縁破片。124は壺形土器の頸部破片である。125・126は、壺形土器の破片と思われるが、天地不明。2点とも5-7T出土。

2. 中・近世、近代の遺物（第25図）

1は須恵質の擂鉢で中世に属する資料であろう。5～3T出土。2は近世の土師皿の細片で糸切り痕がある。長崎街道沿いの3～26T出土。3は染付の小杯で、3～9T出土。4は3～15T付近表探の寛永通宝。5～10は風觀岳山頂部出土の近代銭貨である。5は半錢、他は1錢。



第25図 中・近世・近代遺物実測図 (S-1/2)

3. 石 器 (第26～29図)

【ナイフ形石器 (第26図1・2)】

1は縦長剥片を利用。柳葉形状を呈する。二側縁に急角度の刃潰し加工を施す。2も縦長剥片を利用。斜行する刃部を残して刃潰し加工を施し、胴部は幅広である。

【細石刃 (第26図3)】

3は中間部で、両端ともに切断されている。

【石 錫 (第26図4～20)】

4～9は平基のもの。4は小型の石錫で先端部は丸みを帯びる。5の側縁は基部からまっすぐに立ちあがり、先端部へかけて屈曲する。6は両面ともに横長剥片の素材面を広く残す。7は正三角形の形状。8はぶ厚い剥片を使用。左右非対称の形状。SA-8からの出土。9は剥片の打面を基部とし、両側縁に細部調整を行う。SA-7からの出土。

10～14は浅い抉りをもつもの。10は先端部及び側縁部が丸みを有する。脚端部は尖る。11の側縁部は屈曲し、先端部・脚端部は尖る。12は片面に自然面を残す。一側縁が内湾し、先端部へ向かって細くなる。断面は中央部から基部側にかけてやや抉れている。13は4に近い形状の小型の石錫。5～5Tピット3からの出土。14は上半部を大きく欠損。SA-7からの出土。

15～17はV字状の抉りを有するもの。15・16は長さと幅を有する大型の石錫。15は先端部・脚端部ともに鋭利。脚部は外側に張り出し気味である。17は全長の半分ほどに及ぶ深い抉りを

有する。両側縁はわずかに内湾し、先端部が尖る。

18~20はU字状の抉りを有するもの。18は細長い二等辺三角形状を呈する。脚部は左右非対称。19と20はともに脚部が太く、側縁部は鋸歯状を呈する。

【石 槍（第26図21）】

21は基部で、大きく欠損しているが、細身の形状を示す石槍であろう。

【石 匙（第26図22・23）】

22は縦型のつまみ部と思われる。23はつまみ部が斜めについた横型。粗い調整により抉りを入れ、つまみ部を作出している。

【削 器（第26図24~29）】

素材となる剥片の一辺に刃部を有するもの（24~26）と二辺に刃部を有するもの（27~29）がある。24は半円に近い弧状、25は緩やかな弧状、26・27は直線状の刃部を有する。24は自然面打面。25は調整打面の厚みのある剥片を使用。26は自然面打面の大型横長剥片の末端部に刃部を作出。27は自然面打面の横長剥片の末端部と、もう一辺に刃部を作出。27は背面に自然面を残す。28・29は平面鋸歯状・刃部正面観は波状を呈する。28は自然面打面の剥片の両側縁に刃部を作出。29は背面に自然面を残す。

【搔 器（第26図30・31、第27図32~34）】

30は両面ともに2次加工が施され、一辺に刃部を作出。31~33は内湾状の刃部を有する。31は縦長剥片の末端部に刃部を作出。S A - 3 出土。32は長方形剥片の背面に刃部を有する。背面に自然面を残す。33は三日月状。34は急角度の刃部を有する。

【抉入り石器（第27図35）】

35は一側縁に、片面からの加工による抉りを有する。

【石 錐（第27図36~40）】

錐部の作出方法が、画面及び左右両側縁からの加工によるもの（36~38）、片面の左右両側縁の加工によるもの（39）、片面の片側からのみの加工によるもの（40）がある。36は鋭利な錐部を有する。自然面を残す。37はつまみ部から錐部にかけてくびれる。背面に自然面を残す。38は素材剥片のごく一部に小突起状の微細な錐部を作出する。39は全体的に粗雑なつくりである。40は自然面打面の剥片の形状を活かす。錐部以外の一側縁に使用痕が見られる。

【彫 器（第27図41・42）】

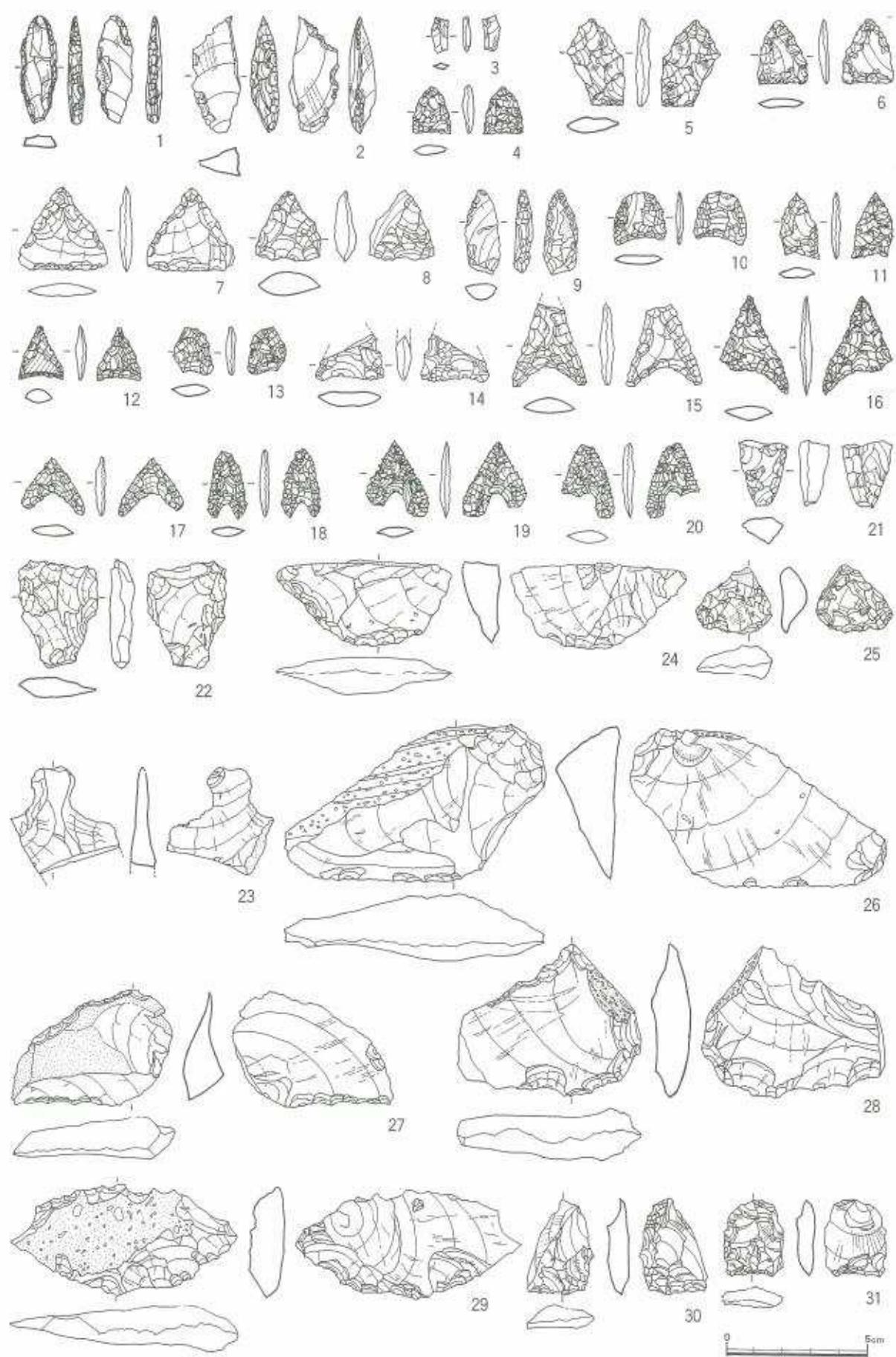
41は縦長剥片を横位にし、打面側から2回の樋状剥離を施して、彫刻刀面を形成する。42は小型の不定形剥片を用い、打面側から1回の樋状剥離と数回の小剥離を施す。

【角錐状石器（第27図43）】

43は断面が三角形を呈し、1面の末端部及び他の2面に調整を行い、刃部を作出する。刃部には微細な磨耗痕が残る。先端部は折損。

【異形石器（第27図44）】

44は三日月状で、全周に両面からの微細な調整を施して、刃部を作出。3箇所の抉りを有す



第26図 石器実測図① (S-1/2)

る。一見、釣り針を模したように見えるが、用途については実用品か装飾品かは不明である。

【打製石斧（第28図45・46）】

45は長大で扁平な短冊形の石斧。46は軟質な石材を使用した撥形の石斧。全体的に風化している。

【磨製石斧（第28図47）】

47は両側面からの成形を行い、両面及び側面の一部に研磨を施して、平滑に仕上げる。頭部資料で対州層群に産する頁岩かと思われる。

【石庖丁形石製品（第28図48）】

48は両刃で、全体を平滑に仕上げる。砂岩製。

【すり石（第28図49）】

49は拳大の円礫を使用。正面右側及び裏面に平滑面を有する。正面右側は、わずかに凹んでおり、手ずれの痕跡と思われる。

【石錘（第28図50）】

50は扁平な円礫の両端に小さい剥離を施して、紐掛け部を作出。

【ハンマー（第28図51）】

51は乳棒状の形状。全面を平滑に研磨している。先端部に敲打痕を有する。

【臼玉（第29図52）】

52は滑石製で、穿孔は両側から行われている。

【使用痕のある剥片（第29図53～62）】

縦長剥片の二側縁に使用痕を有するもの（53～55・58・60）と不定形剥片の一側縁に使用痕を有するもの（56・57・59・61・62）がある。56はSA-1、57はSA-3、58はSA-6、59はSA-7、60はSA-8、61は5-5Tピット1、62は5-5Tピット3からの出土。

【使用痕のあるチップ（第29図63・64）】

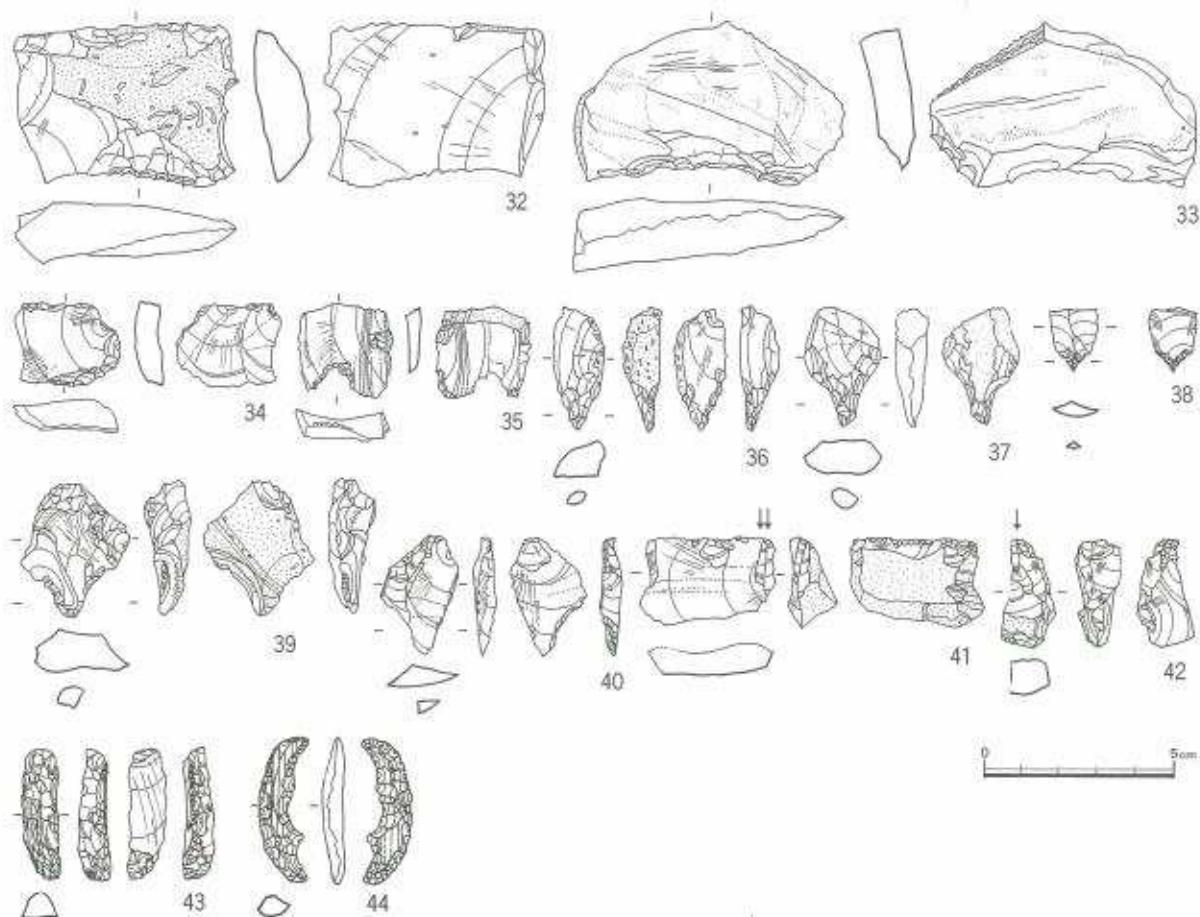
チップ状の碎片に使用痕を有するものを取り上げた。63は全周に、64は一側縁に使用痕を有する。組み合せによる使用が考えられる。

【剥片（第29図65）】

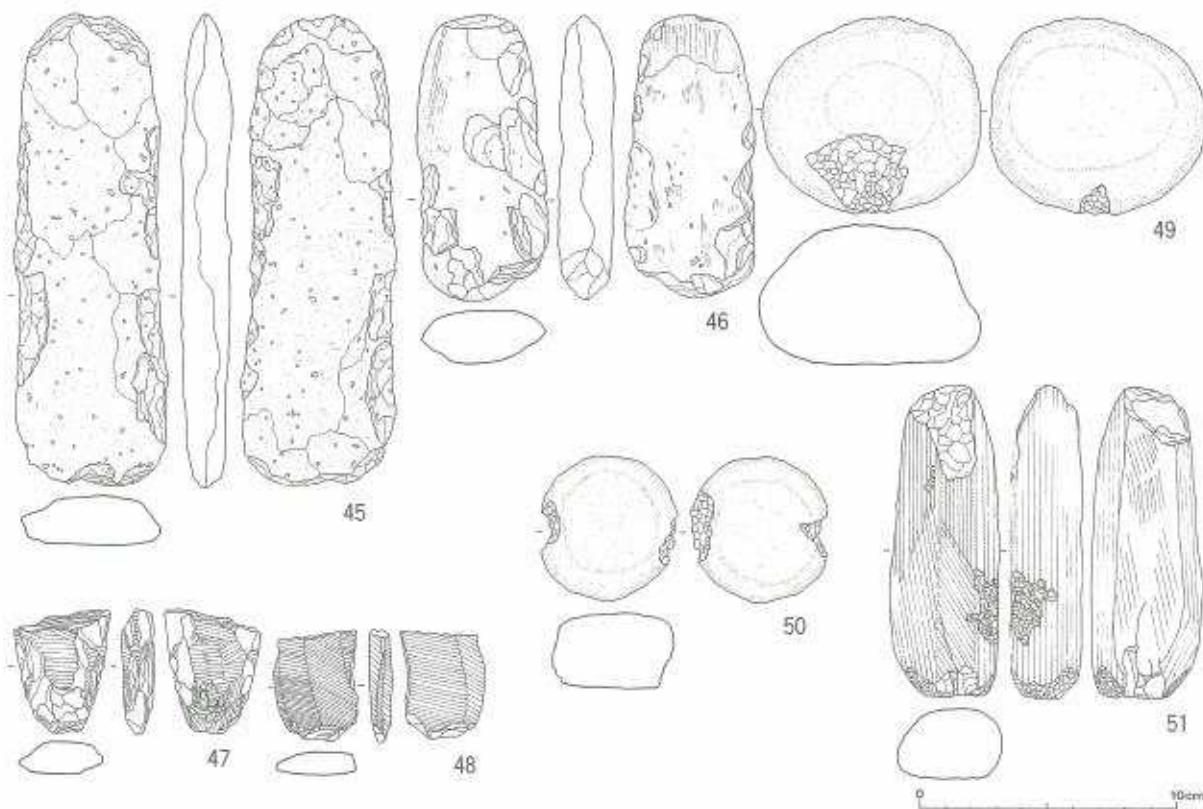
65は調整打面を有する縦長剥片。SA-7出土。

【石核（第29図66～69）】

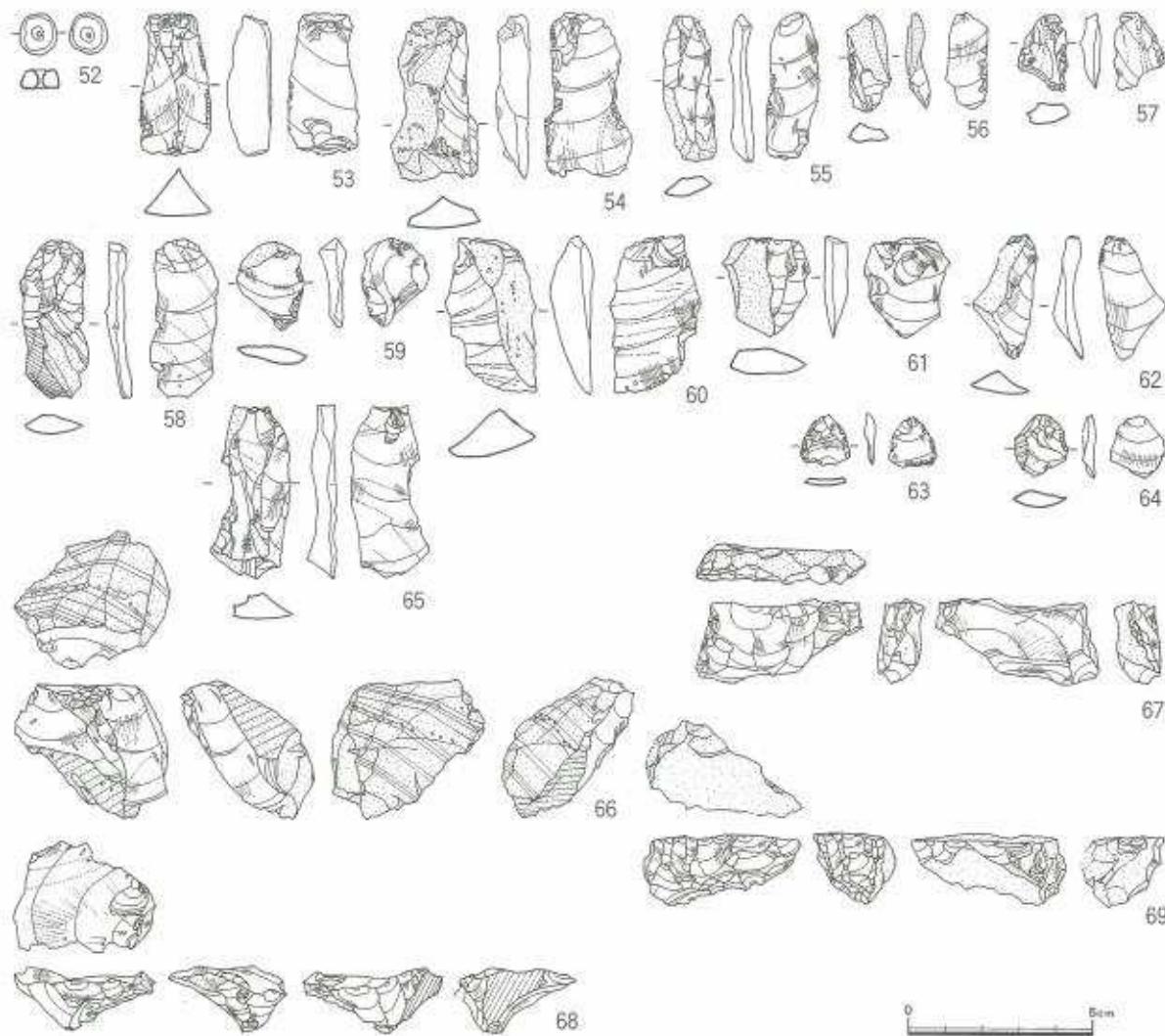
調整打面（68・66）と自然面打面（67・69）がある。66は後方に傾斜する打面を設け、打面の平面形は鋸歯状を呈する。67は薄い剥片を使用。68は自然面打面の剥片を使用、二側縁で剥離を行っている。打面の平面形は66と同じく鋸歯状を呈する。69は一側縁で細かい剥離を行っている。



第27図 石器実測図② (S-1/2)



第28図 石器実測図③ (S-1/2)



第29図 石器実測図④ (S-1/2)

回 No	年次	トレンチ	層位・取り 上げNo	器種	石材	計測値 (cm・g)			回 No	年次	トレンチ	層位・取り 上げNo	器種	石材	計測値 (cm・g)						
						長さ	幅	厚さ							長さ	幅	厚さ				
25	1	1	05	表土	ナイフ	黒曜石	3.8	1.2	0.4	2.6	27	36	5	5-2	表土	石斧	黒曜石	3.1	1.3	0.9	3.6
	2	2	1		ナイフ	黒曜石	4.1	1.7	0.9	4.6		37	5	5-5	2層	石錐	安山岩	3.1	2.0	0.6	4.5
3	3	3-2	59	石刀	黒曜石	1.2	0.6	0.2	0.1		38	3	3-14		石錐	黒曜石	1.6	1.2	0.4	0.4	
4	3	3-9	181	石鎌	黒曜石	1.6	1.4	0.3	0.6		39	5	5-3	2層	石錐	黒曜石	3.5	2.8	1.1	7.4	
5	3	3-2	145	石鎌	黒曜石	3.0	2.0	0.5	2.2		40	5	5-5	2層	石錐	黒曜石	3.1	2.0	0.5	1.7	
6	3	3-5	54	石鎌	黒曜石	2.3	1.8	0.3	1.0		41	3	3-5	143	刮削器	黒曜石	3.5	2.3	0.7	7.5	
7	1	(6)		石鎌	安山岩	2.9	3.1	0.4	2.8		42	5	5-1	3層	刮削器	黒曜石	2.3	1.2	0.9	3.3	
8	5	S A 8		石鎌	黒曜石	2.4	2.2	0.8	3.0		43	4	4-15	2層	角錐状石斧	黒曜石	3.9	0.9	0.7	2.5	
9	5	S A 7		石鎌	安山岩	2.5	2.3	0.8	2.2		44	5	5-5		異形石器	黒曜石	3.8	1.3	0.6	1.7	
10	3	3-15	309	石鎌	黒曜石	1.9	1.8	0.3	0.7		28	45	5	5-5	2層	打製石斧	安山岩	18.7	5.9	1.9	20.0
11	3	3-1	36	石鎌	黒曜石	2.3	1.4	0.4	0.7		46	5	5-7		打製石斧	安山岩	11.2	4.8	2.0	17.0	
12	5	5-5	2層	石鎌	黒曜石	1.9	1.5	0.4	2.2		47	5	5-3	2層	磨製石斧	頁岩	4.9	3.2	1.3	28.2	
13	5	5-5	ピット3	石鎌	黒曜石	1.6	1.4	0.4	0.6		48	5	5-3	2層	石鋸(米沢型)	砂岩	4.3	3.2	0.9	15.3	
14	5	S A 6		石鎌	黒曜石	1.6	2.4	0.5	1.2		49	5	5-6	2層	すり石	安山岩	8.4	7.6	5.4	47.0	
15	5	5-1		表土	石鎌	安山岩	2.8	2.7	0.5	2.2		50	5	5-3	表土-2層	石鎌	安山岩	5.7	4.7	2.9	12.0
16	4	4-12		石鎌	黒曜石	3.4	2.4	0.5	1.4		51	5	5-6		ハンマー	砂岩	12.3	4.2	2.8	21.0	
17	3	3-5	383	石鎌	安山岩	2.0	2.2	0.3	0.6		29	32	2	34		白玉	滑石	1.1	1.0	0.5	0.7
18	5	5-9	2層	石鎌	黒曜石	2.3	1.4	0.3	0.7		53	3	15		HUF	黒曜石	3.8	1.9	1.3	7.0	
19	4	4-26	2層	石鎌	黒曜石	2.6	2.3	0.3	1.0		54	3	3-6		UF	黒曜石	4.3	2.4	0.8	6.8	
20	4	4-11		石鎌	黒曜石	2.5	1.8	0.4	1.1		55	3	3-5		UF	黒曜石	3.9	1.2	0.4	2.2	
21	4	4-16		石鎌	黒曜石	2.2	1.3	0.9	3.2		56	1		S A 1	UF	黒曜石	2.5	1.1	0.5	0.9	
22	5	5-6	2層	石匙	安山岩	3.7	2.8	0.7	7.8		57	3		S A 3	UF	黒曜石	2.0	1.3	0.5	0.9	
23	5	5-2	2層	石匙	安山岩	3.7	3.7	0.9	7.7		58	5		S A 6	UF	黒曜石	4.2	1.7	0.5	2.9	
24	5	5-10	2層	削器	安山岩	6.2	3.9	1.2	21.9		59	5		S A 7	UF	黒曜石	2.3	1.8	0.4	1.5	
25	3	3-7	31	削器	黒曜石	2.7	2.3	0.8	4.6		60	5		S A 8	UF	黒曜石	4.1	2.4	1.1	7.6	
26	5	5-7		表土	削器	安山岩	9.1	5.2	2.1	79.4		61	5	5-5	ピット1	UF	黒曜石	2.6	2.3	0.6	3.3
27	5	5-5		2層	削器	安山岩	5.6	4.0	1.5	22.2		62	5	5-5	ピット3	UF	黒曜石	3.3	1.1	0.6	1.7
28	5	5-5		2層	削器	安山岩	6.4	5.3	1.3	41.6		63	3	3-15	201	UC	黒曜石	1.3	1.2	0.2	0.2
29	5	5-2		2層	削器	安山岩	8.0	3.8	1.1	34.0		64	3	3-2	18	UC	黒曜石	1.6	1.4	0.4	0.5
30	3	3-3	108	削器	黒曜石	3.3	2.4	0.8	4.4		65	5		S A 7	F	黒曜石	4.5	1.8	0.7	5.2	
31	3		S A 3	刮削器	黒曜石	2.7	2.1	0.6	3.0		66	5	5-5		2層	石核	黒曜石	3.6	4.1	2.3	31.2
27	32	3	3-5	139	刮削器	安山岩	5.9	4.3	1.2	36.4		67	3	3-5	105	石核	黒曜石	2.2	4.5	1.2	8.7
33	5	5-2		搔匙	安山岩	7.0	3.8	1.0	40.2		68	5	5-2		表土	石核	黒曜石	1.7	3.5	3.2	10.2
34	3	3-6	189	搔匙	黒曜石	2.7	2.2	0.6	4.4		69	5	5-1		表土	石核	黒曜石	1.9	4.3	2.2	13.4
35	3	3-19	83	抉入石斧	黒曜石	2.5	2.3	0.4	3.0												

第5表 石器観察表

4. 出土傾向の概要について

①地区分けの概要

石棺を内部主体とする支石墓が確認された標高200～216mの丘陵部をA地区（3・5次調査範囲）とし、標高230m前後の風観岳山頂一帯をB地区（2・4次調査範囲）とした。さらに両地区の間にある長崎街道沿いの一帯をC地区（1次調査範囲）、大村市教育委員会が調査を担当し、多くの遺物が出土した地点をD地区と表示とした（第30図）。

②出土遺物から見た風観岳周辺の土地利用

1 旧石器時代 数は5点とわずかであるが、ほぼ調査対象範囲全体に分散している。

2 縄文時代

A地区 刻目突帯文土器が多く出土している。他地区に比べ、土器、石器ともに出土量が圧倒的に多い。石器は数量が多く、狩猟具・工具・加工具・伐採具など豊富な器種構成を示す。

B地区 刻目突帯文土器に先行すると思われる晩期後半の土器が出土している。明確な遺構は確認できていない。A地区と比べ、石器の器種構成は貧弱である。石斧が出土総数の35%（14点中の5点）と一定の割合を示す。

C地区 遺物の量は多くないが、刻目突帯文土器が出土している。刻みが大きくて荒いタイプが含まれている。石器は数・種類ともに少なく、チップ・フレークが大半を占める。

D地区 晩期後半の土器が出土しているが、刻目突帯文土器を伴わない。立地、遺物の内容とともに生活址の雰囲気が濃厚である。時期的にはA地区に先行すると思われる。

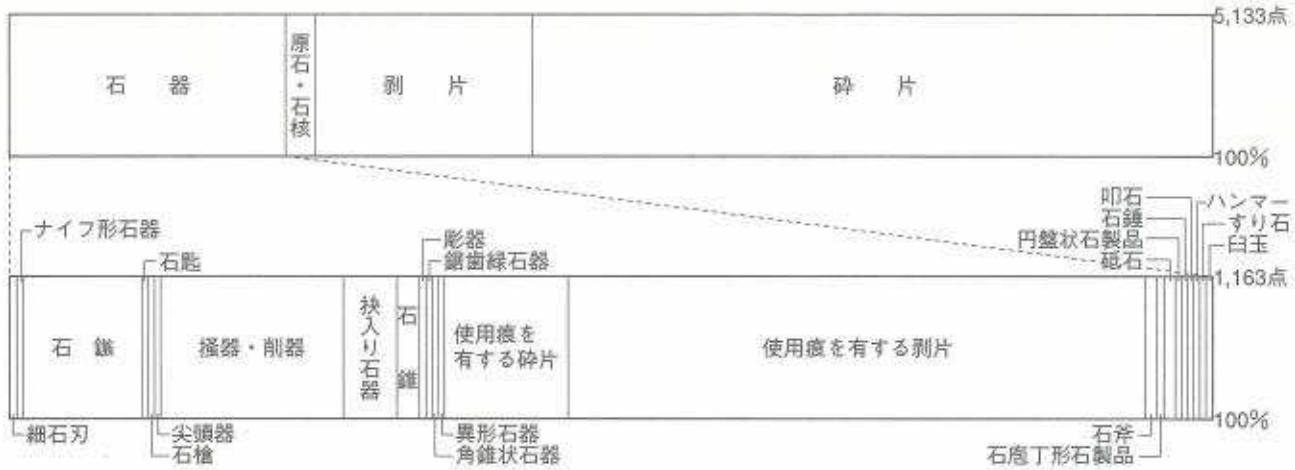
3 弥生時代 A地区の土器の中に弥生初頭と思われる資料が見られる。

4 古墳時代 A地区の東側で高坏を主体とした土器群が出土しており、古墳時代に何らかの祭祀が行われたと思われる。

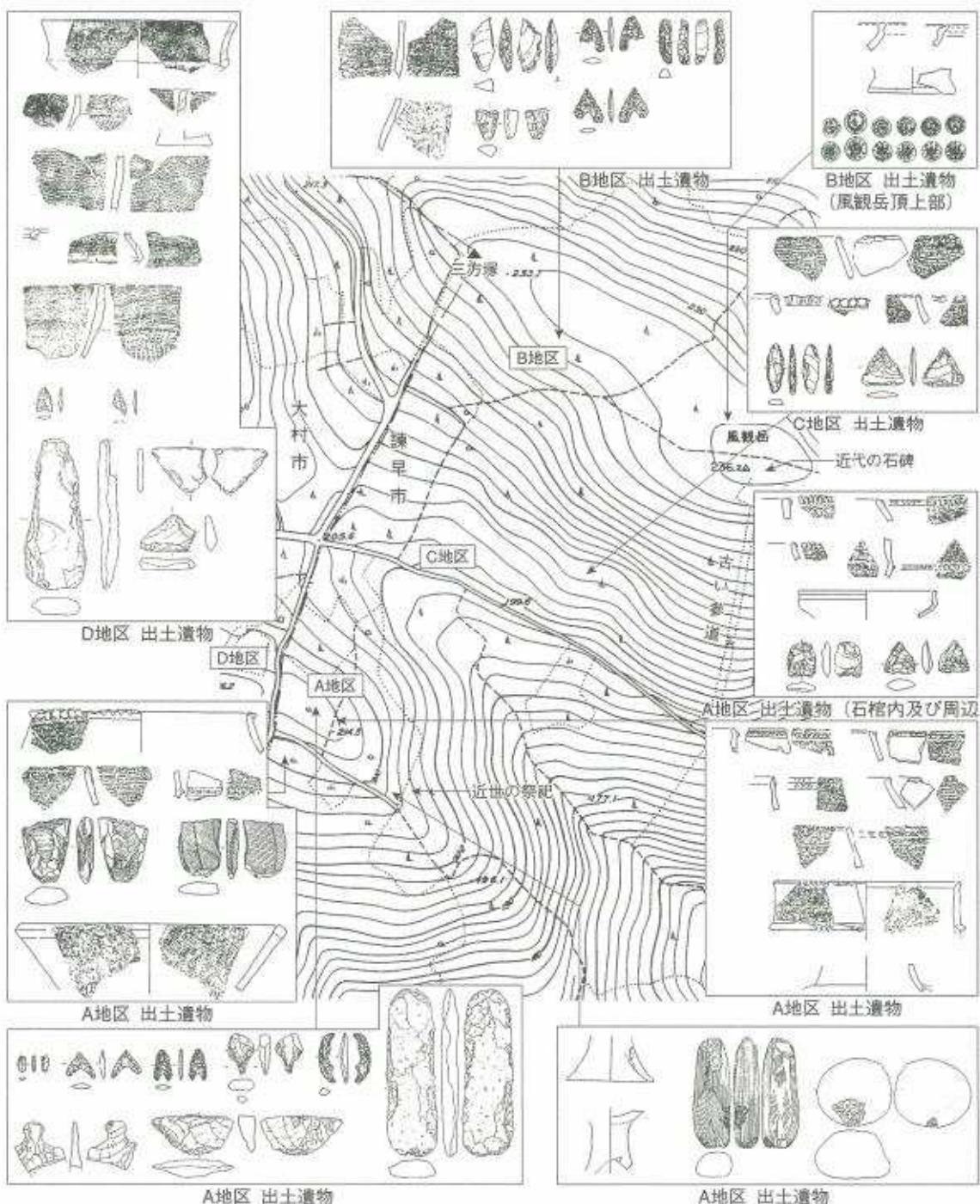
5 古代～中世 古代の遺物は皆無である。A地区で中世のすり鉢が一点出土している。

6 近世 A地区とC地区で数点の出土である。大村領ではこの付近に近世の開拓が入っており、陶磁器類を散見する。

7 近代 風観岳山頂東側で祭礼等が盛んであって、縁日が立ったと伝えられており、明治～大正の硬貨の出土はそれを裏付ける資料と思われる。他に小さなガラス製の菓子器も見つかっている。



第6表 石器組成表



第30図 遺物出土傾向図

第Ⅲ章 まとめ

今回の5か年調査では、特に支石墓の下部構造について新たな知見を得ることができた。

下部構造に箱式石棺を有するもの9基と土壙を有するもの3基が確認され、箱式石棺9基のうち2基は未調査、2基が損壊、1基の上石が消失していたものの、他の4基については、ほぼ築造時の状態を留めた良好な状態で確認された。また3・5次調査で確認されたSA-3～9は複数基が近接して営まれるという支石墓の典型的なありかたを示している。箱式石棺と土壙が混在するとの結果を得た前回の調査であったが、この際の「箱式石棺」との判断は、いずれも上石をあげて確認されたものではなく、検土杖による探索によるものであった。今回は箱式石棺の具体的な構造にまで迫ることができ、石材の組み方に差異があるものの、石棺上部に2層の蓋石を載せる点が共通の特徴としてあげられる。

その他の遺構としてはピット群や土壙を確認した。支石墓以外の遺構は今回が初見であるが、現段階ではそれぞれの性格を推測することはできない。

遺物では、前回の調査ではごく少数の遺物が見られたに過ぎなかったが、今回、特に3次・5次調査範囲で「生」の側面を思わせる日常的に用いられる遺物が数・種類とも豊富に出土した。これは他地区と比べて、土地利用の密度に違いがあること、墓という「死」の側面以外の土地利用がなされていたことを反映するものであろう。よって従来「風観岳支石墓群」の名称で墓域としての認識がされていたが、日常生活の側面が垣間見えることから「風観岳遺跡」の名称が適しているのかもしれない。これまで、支石墓群に伴う集落が確認された例を見ないが、近辺にその痕跡があるのではないかとの期待を抱かせるに足る内容であった。

他地域との石棺形態の比較、遺物の詳細な検討、集落跡の追及など残された課題が多い。これらの点については次回に譲ることとし、今回は調査結果の一端について記述するに留めたい。

<参考文献>

- 田川 肇編 1976 『風観岳支石墓群調査報告書』(諫早市文化財調査報告書第1集) 諫早市教育委員会
正林 譲・高野晋司 1981 『国指定史跡原山支石墓群 環境整備事業報告書』北有馬町教育委員会
正林 譲 1983 『大野台遺跡』(鹿町町文化財調査報告書第1集) 鹿町町教育委員会
川道 寛 1997 『宇久松原遺跡』(宇久町文化財調査報告書第4集) 宇久町教育委員会
村川 逸朗 1997 『西鬼塚支石墓・石棺群』(有家町文化財調査報告書第3集) 有家町教育委員会
西谷 正 1997 『東アジアにおける支石墓の総合的研究』九州大学考古学研究室
大野安生 2000 『黒丸遺跡ほか発掘調査概報 Vol. 2』(大村市文化財調査報告書第24集) 大村市教育委員会

報告書抄録

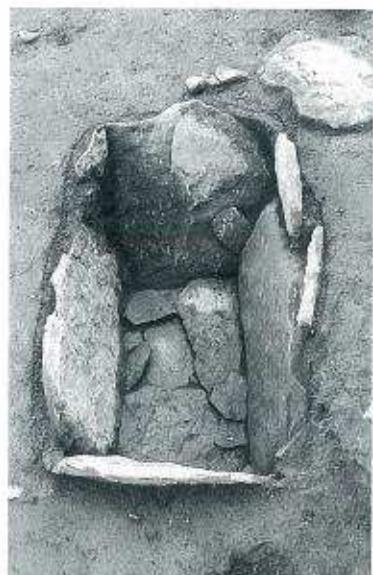
ふりがな	ふうかんだけしせきばぐん						
書名	風觀岳支石墓群						
副書名							
卷次							
シリーズ名	諫早市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第15集						
編著者名	川瀬雄一・橋本幸男						
編集機関	諫早市教育委員会						
所在地	〒854-8601長崎県諫早市東小路町7番1号 TEL (0957) 22-1500						
発行年月日	西暦2002年3月29日						

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
風觀岳 支石墓群	長崎県諫早市 破籠井町 下大渡野町	42204	84-20	32度 53分 21秒	130度 0分 52秒	19970806～ 19971008 19980817～ 19981029 19990728～ 19991015 20001204～ 20010227 20010710～ 20011011	207m ² 181m ² 396m ² 483m ² 593m ²	学術調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
風觀岳 支石墓群	墳墓	縄文時代晩期	支石墓	縄文土器 石器	

図 版

図 版



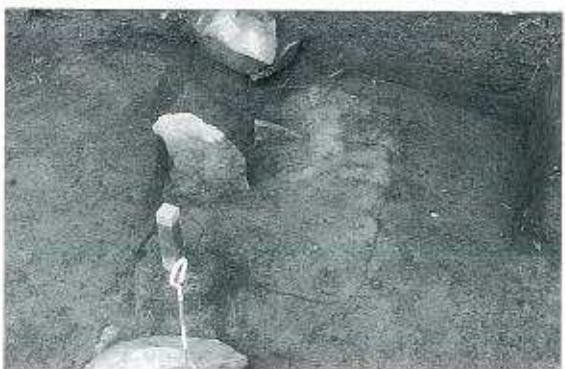
SA-1 下部構造①



SA-1 下部構造②



SA-3~9 出土地点近景



SA-2 検出状況



SA-3 蓋石 (2層目)



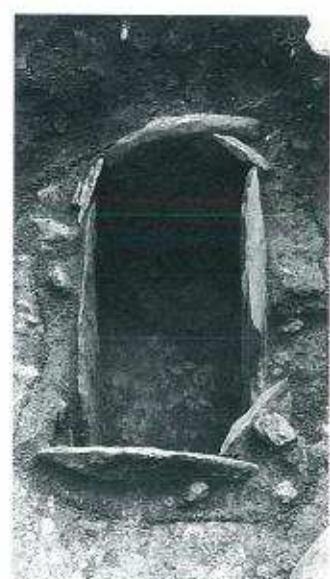
SA-3~5 上石近景



SA-3 蓋石 (石棺直上)



SA-3 下部構造①



SA-3 下部構造②

図版 3



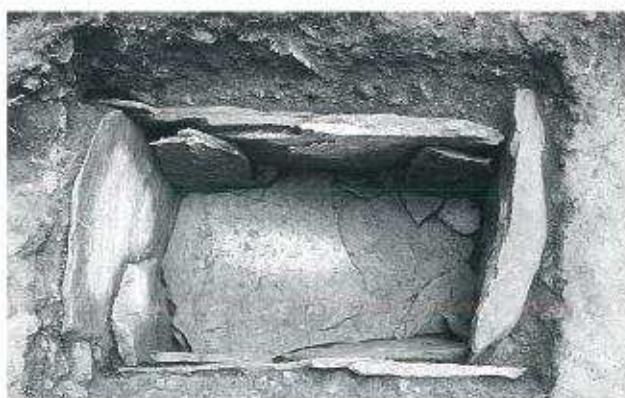
左：SA-4 上石 右：SA-3 下部構造



左：SA-4 蓋石（2層目） 右：SA-3 下部構造



SA-4 蓋石（石棺直上）



SA-4 下部構造①



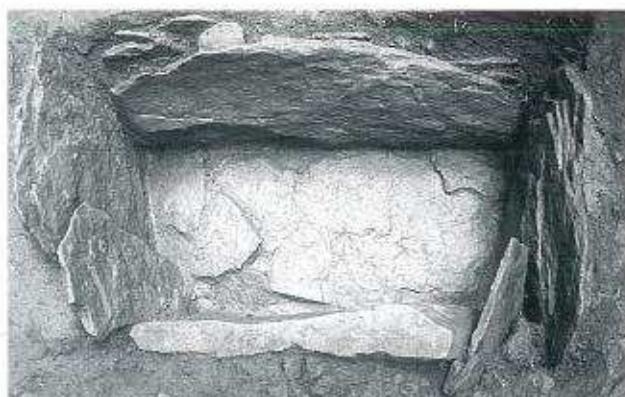
SA-4 下部構造②



SA-6～9 近景



SA-6 蓋石



SA-6 下部構造



SA-7 出土状況①



SA-7 下部構造①



SA-7 下部構造②



SA-7 出土状況②



SA-7 下部構造③



SA-8 上石



SA-8 蓋石 (2層目)



SA-8 蓋石 (石棺直上)



SA-8 下部構造①



SA-8 下部構造②

図版5



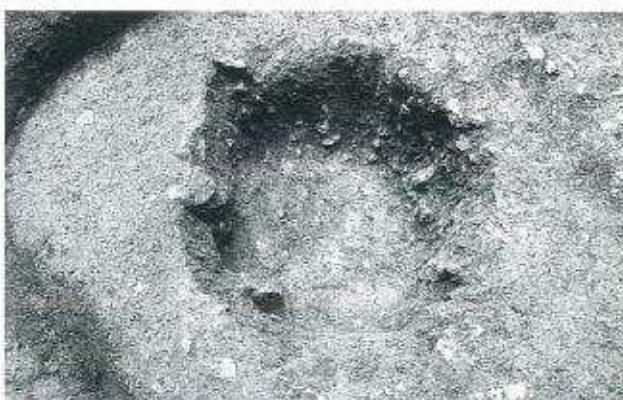
SB-1 上石



SB-1 下部構造



SB-3 上石



SB-3 下部構造



SB-2 上石



SB-2 下部構造



2-34T 土壌①



2-34T 土壌②



5-10T Pit 4



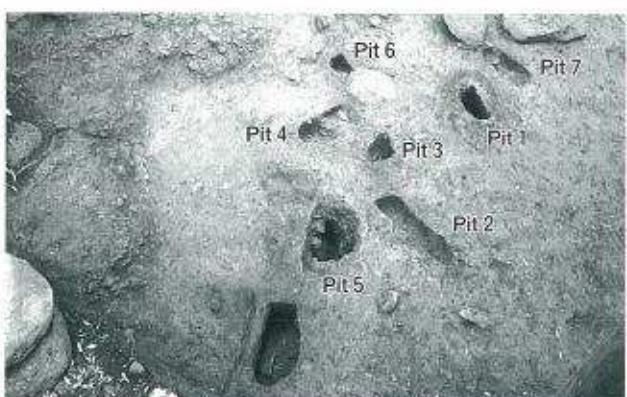
5-10T Pit 8・9



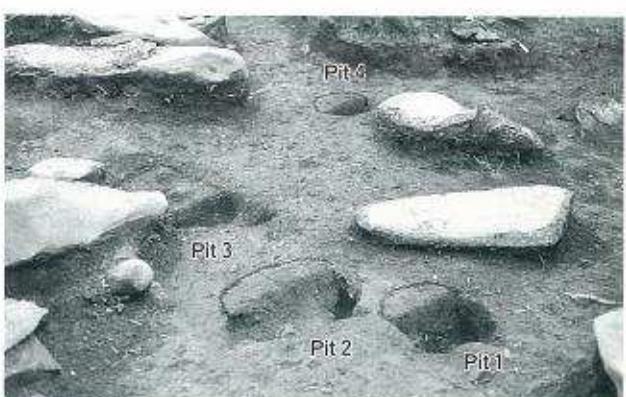
5-10T Pit 12



5-10T Pit 13



5-5T Pit群



5-1T Pit群

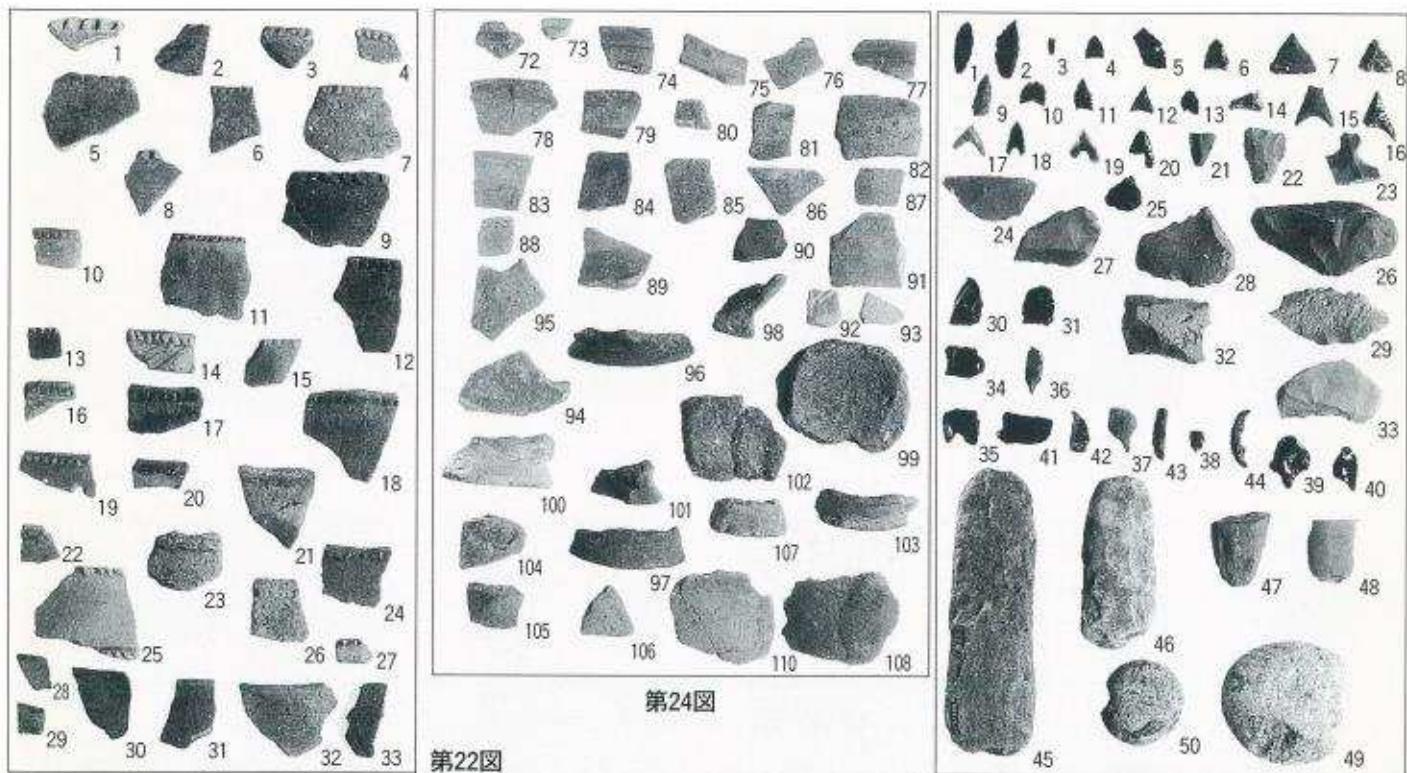


5-1T Pit 1



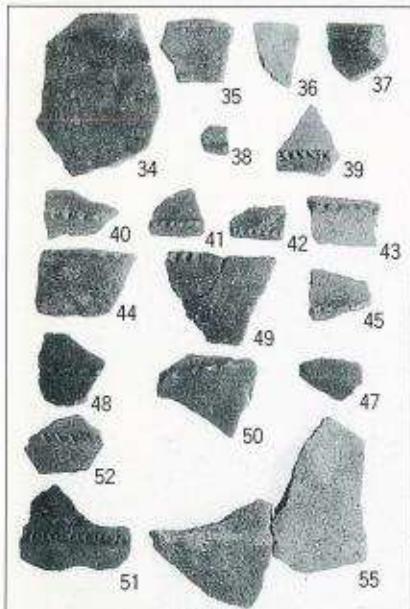
5-1T Pit 4

図版7

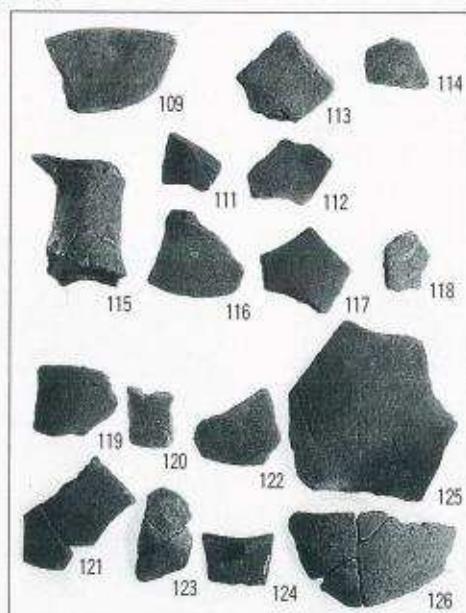


第24図

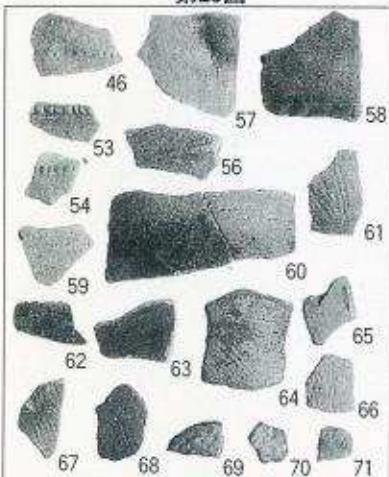
第22図



第23図

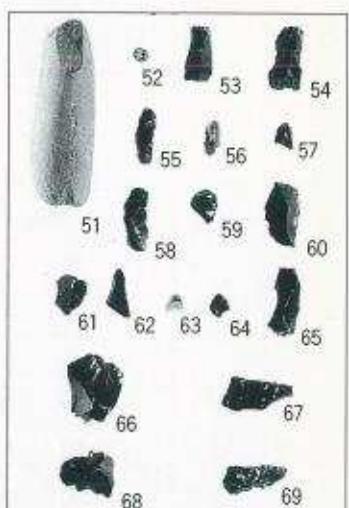


第24図

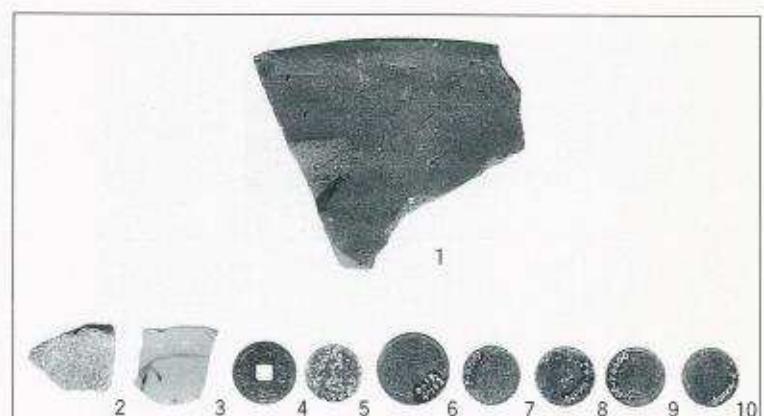


第23図

第26~28図



第28, 29図



第25図

諫早市文化財調査報告書 第15集

風観岳支石墓群

発掘調査概要報告書

2002. 3. 29

発行 諫早市教育委員会

〒854-8601 長崎県諫早市東小路町7番1号
TEL (0957) 22-1500

印刷 (株)昭和堂

〒854-0036 長崎県諫早市長野町1007-2
TEL (0957) 22-6000